創世期

そうせいき

麻原彰晃





創世期

そうせいき

麻原彰晃





オウム出版

序

すべては、心の現われである——この言葉は、今から二千五百年前、サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）がお説きになった世界観のポイントを示す言葉である。

この「すべては、心の現われである」という意味は、どういうことであろうか。これは、心の働きによって微細・中位・粗雑なエレメントが反応し、そして世界ができ上がるということを意味しているわけである。

『旧約聖書』や『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」や、あるいはマホメットが説いたイスラム教、あるいはヒンドゥー教、このすべての世界観は、これからわたしが説き明かす原始仏教の世界観の中に包含される。

なぜすべての世界観が包含されるのかというと、それはキリスト教やイスラム教やユダヤ教、あるいはヒンドゥー教といったものの教えの本質は、「有」つまり生存の世界に限定されているが、原始仏教の世界は、その有を超越した「超有」、あるいは「非有」の世界観を併せ持っているからである。

そしてこれは、今キリスト教を信じている方やイスラム教を信じている方やユダヤ教を信じている方やヒンドゥー教を信じている方や、あるいは仏教を信じている方、そのすべてが読むだけで、その世界の成り立ち、そしてわたしたちが何をなせば本当に幸福になれるのかを説き明かした「啓示の書」ということができるであろう。

ところで、これらの内容は、深いサマディに入って経験することのできる内容である。そして、現代の疑い深い日本人にその原典である『創世期経』を示すことにより、わたしの経験しているものと、そして原始仏教の経典とが一致していることを証明したいと考え、巻末にデーヴァナーガリー文字のパーリ語で『創世

期経』の原本を載せることにした。
この経の流布によって、すべての魂が真実に気付き、正しい生き方の実践をなされるとするならば、幸いであると考える。

一九九一年七月二十一日　黎明のとき

麻原彰晃

創世期・目次

●創世期

創世期

第一の啓示　虚空、そして創造

◉その一　母なる十字金剛

そのときのことを、あなたはおそらく覚えてはいまい。長い転生のうちに、あなたはすっかり迷妄と忘却にとらわれてしまったのだ。

今、わたしはあなたにそのすべてを告げることにしよう。

わたしは、今生そのためにこの世に降りてきたのである。

わたしがあなたの前に現われたのは、まさにその記憶をあなたに呼び覚ますためなのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞

きなさい。

それは大いなる虚空のときであった。大宇宙の一切は完全な静寂と静止の中にあったのだ。

しかし、創造のときが近付いていた。そのとき、四方を貫いて大いなる風が巻き起こった。その大風は、集められ、凝縮され、その空間から黄金色に光り輝く緑色の十字金剛が立ちいでたのである。

強い風の集結と圧縮によって形成されたこの十字金剛は、堅固であった。そして、いかなるものによっても壊すことのできないものであった。
やがて、その十字金剛の上方に、黄金色のくびき形の雲がたちこめ、大粒の雨、小粒の雨が十字金剛に降り注がれた。
降り注がれた雨水は、十字金剛を形どっている風の力の覆いによって、もれなく

蓄えられ、ついには大海のようになったのだ。
そして、その中央に千の金の蓮華が現われた。
「素晴らしい。」
これを見た浄土の神々はこう叫ぶのだ。
なぜならば、これが千の覚者方の現われるしるしであることを神々は知っているからである。

「何と素晴らしい。」
「優れた時代の到来だ。」
と、神々は歓喜し、叫ぶのであった。
十字金剛の中の大海は、強烈な風によってかき混ぜられる。
やがて、その十字金剛を包むように、オレンジ色の楕球が現われるのである。

◉ その二　降り注ぐ雨、巻き起こる風

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

これは真理であり、それゆえあなたの観念を超えるものである。よって、その観念を捨て、よく聞きなさい。

＊

この球の内側に、引き続き雨が降り注

ぐのだ。
このとき、既に十字金剛の内側の水は飽和状態になっている。そこで、雨は楕球と十字金剛の間の隙間に絶え間なく降り注ぐ。この雨は非常に粘性の強い水溶性の元素でできているのである。
このようにして、十字金剛と楕球との隙間が外側の海となるのだ。
この海は、やむことのない風によって

激しくかき混ぜられ、「最高・中位・劣悪」という三段階のエレメントを作り出すのである。

やがて、この楕球の海の底部に、千個の半月型をした黄金色の台座が現われる。それは神々によって、「大いなる力」と呼ばれるのだ。

この千の黄金色の台座の上には、七つの金の山脈、四つの大陸、八つの隣接し

た島々、多くの他の島々、金の山々などが同時に現われるのである。

◉その三 讃えよ、メール山

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

これは真理であり、それゆえあなたには謙虚さが必要である。なぜならば、傲慢さはあなたに何の利益も与えないから

である。

＊

この黄金の台座の中央には、巨大なメール山がそびえているのだ。それは、「最高のエレメント」から作られ、海面から八千ヨージャナ上に延びており、なだらかで山頂は丸みを帯びている。

ところで、このメール山という名は、本来は正しくはない。この山の名を正し

く語るならば、それは「完全無欠山」とするのがふさわしいのである。

そしてこの山には、四つの側面があるのだ。それは、東の面は水晶、南はアクアマリン、西はルビー、北は黄金という四つである。

空は、それぞれの色をはっきりと反射している。

このメール山には、海面から山半分の

高さまでに四つの段がある。このふもとにあるのが第一天界、ふもとから山頂にかけてが第二天界である。

＊

ここであなたが、その近い前生を思い出すならば、この第一の天界とは今、東にはガンダッパが住み、西には龍が住む世界であり、また、この第二の天界とは今、有能神の住む世界であると知るに違

いない。

このように、あなたは注意深く、敬意を払ってこの話に耳を傾けるべきである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

「中位のエレメント」はメール山の外側の七つの山脈を形成するのである。これは、メール山を取り囲む外輪山である。

その七つとは、
（一）くびきの形をした山
（二）すきの形をした山
（三）「アカシアの木の場所」という山
（四）「見て美しい」という山
（五）「馬の耳」という山
（六）完全に折り曲がった山
（七）外周を形成する山
という名である。

それらの山脈の間の空間は湖になっていて、それぞれは八つの性質を持っている。それは、

（一）冷たさ
（二）おいしさ
（三）軽さ
（四）柔らかさ
（五）透明さ
（六）無臭性

（七）飲んでも喉に害がないこと
（八）飲んでも胃に害がないこと
という八つなのである。

◉その四　四つの大陸、八つの島々

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

これは真理であり、それゆえあなたには智慧が必要である。智慧ある者は、こ

れを如実に理解することであろう。

＊

「劣悪なエレメント」は、七つの山脈の外側にある四つの大陸、八つの隣接する島々、多くの他の島々、金の山脈からなる外縁を形成するのだ。

四つの大陸とは、

（一）東　高貴なる身体を得る大陸

（二）南　バラリンゴの大陸

（三）西　願いがかなう牛の大陸
（四）北　悪しき音の大陸
である。
八つの島々とは、
（一）東「身体」という島
（二）東「高貴なる身体」という島
（三）南「尾状の扇」という島
（四）南「別の尾状の扇」という島
（五）西「動き」という島

（六）西　「完全な道を踏む」という島
（七）北　「悪しき音」という島
（八）北　「悪しき音の月」という島

である。そして、四つの大陸それぞれには名もない大きさ、形も様々な数多くの島々、そして千の付属的な地域があるのだ。

これらを取り囲む山脈は、火山性の鉄でできており、外側の境界つまり外縁を

形成している。これを名付けて「黄金の山々」という。
大陸を除く、黄金の山々の外側から外縁までは塩水で満たされていて、「塩水の海」と呼ばれている。
この海は外縁の馬の顔をした山脈と接するが、この山は火山で、その火が海を蒸発させ、その境を越えさせないようにしているのである。

＊

ここで、あなたの心に少しでも不安や恐怖の念が生じるならば、それは幸いである。なぜならば、この外縁の山脈は決して望ましくなく、あなたに喜びをもたらさない所だからである。

そのように、あなたは一刻も早く、思い出さなければならないのである。

＊

このように、メール山の世界とそれ以下の世界ができ上がるのだ。すると、その山の上方に四つの雲状の空間が現われるのである。

それと同時に、黄金色に輝く緑色の十字金剛には、十方から吹き込まれる風の働きが止む。そして、それは球状の光り輝く黄色い神聖球になるのである。

この黄色は、レモン色のようにも見え

る。実に、この球体こそ、後に神聖天として知られる世界なのである。

＊

ここまでが、一つの全容である。これ以上のものは存在しない。また、これ以外のものも存在しないのである。

あなたは、このわたしの言葉を繰り返し何度も味わうがよい。それは、あなたに大いなる利益を与えるに違いないであ

ろう。わたしは、このように語る者なのである。

第二の啓示　転落の始まり

◉その一　光を放ち、飛来する日々

衆生よ、そして高貴なる魂よ、さらによく聞きなさい。

次にわたしは、今あなたがあなたと知る魂について語ろうとするのだ。

＊

見るとこのオレンジ色の楕球の上には白い光球があるのだ。そして、そこに住む人こそ、まさにかつてのあなたなのである。

その住人は――いや、ここであなたのよく知る「神」という言葉を使うことにしよう――神々は、美しい透けるような身体をし、意識から成り立ち、喜びを食

べ、自ら光を放ち、空中を飛行し、至福の状態で存在しながら、久しく大変長い間、そこにとどまっているのである。

＊

あなたはおそらく覚えてはいまい。それは、善業に満ち、功徳があり、今のあなたに比べてはるかに幸福の多い世界の様子なのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞

きなさい。

真理勝者は時を選び、場所を選び、この哀れな人間界に降り、その記憶を呼び覚まさせようとするのである。

よって、あなたはわたしの言葉を正しく聞かなければならないのである。

◉その二　落下、苦悩へ

さて、ところがである。大変長い時が過ぎ、この世界が創造されるとき、この光音天の世界の一人の神の放つ光が弱まるのだ。

＊

この光が弱まるとは、どのようなことであろうか。

かつて、自らが光を発する存在であったことを忘れてしまったあなたにその意味がわかるであろうか。
それは、大変悲しむべきことなのである。

*

彼はその世界から落ち、白い光の世界から消え、瞬間的にレモン色の神聖天の世界へと転生するのだ。

すなわち、魂の落下が始まったのである。

彼はここで、神聖天に存在するただ一神（ひとり）の住人として、威厳を有し、喜びを食べ、空中を飛行する。しかし、その自らが放つ光はずっと弱くなっており、また彼はたった一神であるための孤独にとらわれている。そして、彼はこう考えるのである。

「本当に、この世界に他の魂がやってこないでであろうか。」と。

ちょうど同じ頃、白い光の世界からまた一神、二神と、神々が光を失い、色あせ、もがきながらその世界を落下するのである。そして、彼らは一神、また一神と神聖球の世界へと転生する。彼らはここでやはり意識から成り立ち、喜びを食

べ、空中を飛行し、至福の状態で存在しながら、大変長い間とどまるのである。
しかし、その自らが放つ光はずっと弱くなっている。そして、初めにこの世界に転生した神が大変威厳を持っているのに対して、ずっと威厳がなくなっているのである。
このとき、万物すべては水となっており、暗闇があり、暗闇の暗黒がある。そ

して、月と太陽、恒星と惑星、夜と昼、半月とひと月、季節の周期などは認識し理解されず、女と男といった性別も認識し理解されない。すなわち、「衆生は衆生である」と命名され、この段階においては性の分化はなされてはいないのである。

◉ その三　錯覚

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

ここであなたは思い出さなければならない。このとき、あなたには誤った見解が生じたのだ。それは、間違った見解であり、とらわれた見解である。

＊

すなわち、あなたは初めにこの世界に転生した大神聖天によって、自らが創造されたと錯覚を起こし、その大神聖天を敬うようになるのである。そして、大神聖天も同じように自らが他の魂を創造したと錯覚を起こすのである。

このようにして、ここで神々の間に一つの煩悩である「身分の上下」が生じるのである。

◉その四 渇愛の生起

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

ここでまた、長く繰り返される災いの新たなきっかけとなるときが近付こうとしているのだ。

＊

長い時が過ぎたあるとき、この神聖天

に「地の味」というものが現われ、水中に均一になった。そして、あたかも牛乳を熱して冷やすと表面に広がるように、「地の味」は出現したのである。

それには、色彩と香り、そして味があった。あたかも、発酵したバターや他のバターが持っているかのような色彩と、また純粋である極めてまれな蜂蜜のような味わいがあったのだ。

ここで、あなたは思い出さなければならないのだ。

そのとき、ある貪欲な一神（ひとり）の神が「地の味」を指で味わったのだ。

「おや、これは何だろう。」

と。それは実に単なる興味であり、小さな好奇の心であった。しかし、それがもたらした結果は甚大であったのだ。

それは彼を喜ばせ、その結果、彼に渇

愛が生起したのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、この喜びとはやがて大いなる苦悩を伴うものであることに、そのとき彼は気付かなかったのである。

渇愛とその喜びとは、まさにそのようなものなのである。

＊

他の神々は、初めそれをいぶかしげに見守っていた。しかし、そのうちに集まってきた神々の中にも同じように「地の味」を指で味わう者が現われたのである。

「おいしい。」

「本当に、おいしい。」

このようにして、それを味わった他の神々の中にも、同じように渇愛が生起したのである。

そこで、この「地の味」がおいしいということがわかった神々の中に、今度は「地の味」を手でちぎり取って食べ始める者が現われたのである。

＊

あなたは、このことから知らなければならない。このように、煩悩に支配された者の欲求は、増大していくのである。

そして、それはあなたの心を粗雑なもの

へと縛り付け、自由を損なわせ、喜びの裏側にある苦しみを生起させ、ついにはただ落下をもたらすのである。

なぜならば——このとき、それまで神々が自ら放っていた光が消えたからである。

◉ その五　月と太陽、夜と昼の誕生

神々は「地の味」を食べるようになった。それを食べ物とし、栄養とするようになると、その神々の身体は粗雑化し、容色は色あせていった。

そして、「地の味」を貪った神々とそうしなかった神々との間に容色の差異が生じ出したのである。

やがて、容色の良い神々は、容色の悪い神々を軽蔑するようになったのである。「我々は彼らより容色が良い。彼らは我々より容色が悪い。」と。そして、この容色の自負によって、「慢」が生じたのだ。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

この軽蔑、そして慢とは、あなたが今よく知るところのものである。このような邪悪な心は、貪りというものを背景として、こうして少しずつ少しずつ形成されていったのである。

そして、それは落下をもたらすのみなのである。

＊

こうして、自ら放つ光が消え、微細な

光の身体から粗雑な身体へと変化したとき、貪りの強かった神々は神聖天から落下したのである。そして、その貪りの度合によって、第六天界、第五天界、第四天界、第三天界へそれぞれ転生したのである。

このときである。月と太陽がはっきりと出現したのだ。そして、恒星と惑星が出現したのだ。そして、夜と昼、半月と

ひと月、季節の周期が認識し理解されるようになったのである。

*

衆生よ、そして高貴なる魂よ、このようないきさつを見るならば、あなたがこの月と太陽とを崇めることは、果たして正しいことなのであろうか。しかし、人を迷わせてやまない多くの無明の凡夫は、この天体を賛美し崇拝させるのである。

＊

このときをもって、この大宇宙は虚空の時期を終わり、再び創造の時期へと移行するのである。これをある者たちは、「成劫（じょうごう）」と呼んでいるのだ。

第三の啓示　繰り返される喪失・消滅

◉その一　嘆き悲しむ

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

第六天界、第五天界、第四天界、第三天界――この世界には「地の味」がなかっ

たのである。そこで、ここに転生した神々は、大変嘆き悲しんだ。
「ああ、素晴らしい味覚よ。ああ、素晴らしい味覚よ。」
と。
ここで、あなたは気付くことであろう。
つまり、現在でも、人は何らかの素晴らしい味を得たとき同じように、
「ああ、素晴らしい味覚よ。ああ、素晴

らしい味覚よ。」
と言うということを。
つまりこの言葉とは、本来このような意義のものだったのである。それがその意義が理解されないまま、今も使われているということなのである。

*

ところで、ここでこの落下した魂が、嘆きや悲しみの原因について理解するこ

とができたならば、幸いであった。しかし哀れにも、それはできなかったのである。そのために、あなたは今なお多くの悲哀を味わわなければならないのである。

よって、あなたは、今この瞬間にも悟らなければならない。

そのためにこそ、わたしはこの法則を明かしているのである。

◉ その二 新たなる落下

ところが、ここで第六天界、第五天界、第四天界、第三天界それぞれの世界に新たに粘り気のある「地の餅」が出現するのである。それは無智に覆われた者にとっては、新たな不幸の因となるものであった。

それはちょうどキノコのようなもので

あり、まさにキノコのように出現したのである。それには、色彩と香り、そして味が備わっていた。すなわち、ちょうど、発酵したバターや他のバターが持っているような色彩や純粋で極めてまれな蜂蜜のような味わいがあったのである。

そこで、神々は「地の餅」を食べ始めたのである。そして、彼らはそれを大変長い間食べ物とし、栄養としたのだ。

すると、その身にはさらに非常に粗雑なものが現われ、容色が一層色あせていったのである。
そして、それはこの「地の餅」をどれだけ貪ったかによって異なり、神々の間で差異が生じたのである。そこで、容色の良い者たちは、ここでも容色の悪い者たちを軽蔑するのであった。
「我々は彼らより容色が良い。彼らは我々

より容色が悪い。」
と。
　そして、この容色の自負によって、こ
こでも「慢」が生じたのである。
　このとき、貪り続けた神々は、容姿が
悪くなり、第六天界、第五天界、第四天
界、第三天界から落下し、第二天界、第
一天界へと転生したのである。

◉その三 慢の増大

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

わたしはこのように、あなたに不幸の因とその起源を説いているのである。そして、それを、あなたが遥かずっと以前から延々と繰り返してきたということを説いているのである。

＊

さて、第二天界、第一天界の神々は、それぞれの世界に蔓草が出現したことに気付いた。それはちょうど竹のようなものであり、まさに竹のように出現したのである。それには、色彩や香り、そして味があった。すなわち、ちょうど発酵したバターや他のバターが持っているような色彩や純粋で極めてまれな蜂蜜のよう

な味わいがあったのだ。
　そこで、神々は蔓草を食べ始めたのである。そして、彼らがそれを大変長い間食べ物とし、栄養とするうちに、その身にはまた一層粗雑なものが現われ、容色がさらに色あせていったのである。それはこの蔓草をどれだけ貪ったかによって異なり、神々の間に差異が生じたのである。

そこで、容色の良い者たちは、ここでも容色の悪い者たちを軽蔑するのであった。

「我々は彼らより容色が良い。彼らは我々より容色が悪い。」

と。

そして、この容色の自負によって、ここでも「慢」が生じたのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

あなたは、今も傲慢さに心を支配されているが、果たしてそれは正しいことなのだろうか。

わたしがあなたに、このような高い世界を説いているのは、あなたが今大切に考え、誇りと考えているものがそれだけの価値のないものであることを証明する

ためでもあるのだ。
ここで、あなたは謙虚さと少しの勇気を持たなければならない。
それは、あなたの心を解放する上で大きな助けとなることであろう。

◉その四　いとわしき性の分化

ところが、長いこと食されたこの蔓草は、ある日第二天界、第一天界から消えてしまったのである。そこで、神々はまた大変嘆き悲しんだ。

「ああ、なくなった。ああ、蔓草が消えてしまった。」

と。

ここでまた、あなたは気付くであろう。

つまり、現在でも、人は何らかの苦の法則に触れたとき、このように言うのだ。

「ああ、なくなった。ああ、消えてしまった。」

と。

つまりこの言葉とは、本来このような意義のものだったのである。それがその意義が理解されないまま、今も使われて

いるということなのである。
そして、蔓草が消えたとき、今度は耕さなくとも自然と生え、しかもそのまま食べることができる米が出現したのだ。
この米には、米ぬかやもみがらがなく、よい香りがする米粒がなるのであった。
さらに、それは夜夕食のために持ち帰っても早朝には熟して再び生長し、早朝朝食のために持ち帰っても夜には熟して再

び生長し、決して途切れることがないのである。
そこで、神々は、この米を大変長い間食べ物とし、栄養とした。すると、その身には一層粗雑なものが現われ、容色がさらに色あせていったのである。
そして、ここで男性と女性の別が初めて生じるのだ。つまり、女性には女性の性器が出現し、男性には男性の性器が出

現したのである。
そこで、長い間、女性は男性を切望し、男性は女性を切望するようになった。そしてお互いに切望し合ったことから愛著が生じ、色情が生じたのである。そして、色情によって性交にふける者たちが現われたのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞

きなさい。

これが性の交わりの始まりである。そして、それは新たなる錯覚の始まりでもあったのである。

今日、あなたはどれほどこの異性というものに心を縛られ、煩わされているか、思い出すがよい。

このようないきさつを知るならば、それは本来、要らぬものであったと、あな

たは知るであろう。
あなたは、この生殖器の喜びによって、大変大きなものを失わなければならないのだ。

●その五　家の始まり

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。
そのとき、その性交にふけっている神々

に、他の者は泥や炭、または牛糞を投げ付けて罵倒したのである。

「不浄な者よ、滅びろ、不浄な者よ、滅びろ、なんでこんなことをするんだ。」

と。

ここで、あなたは気付くことであろう。現在でも、そのような風習がある地域には残っていると。例えば、ある地方では花嫁が連れ出されるとき、泥や灰や牛糞

を投げつけたりするのだ。
つまり、それは本来このような意義のものだったのである。それがその意義が理解されないまま、今もなされているということなのである。
性交にふけった者たちは、ひと月もしくはふた月の間、村や町に入ることが許されなかった。
ここで、性交にふけることが邪悪な法

則とされ、長い間虐待を受けることとなったために、性交にふけろうとする者たちはそれを隠すために、家に入ったのである。

これが、家の始まりなのである。

ところが、性交にふけっていた者たちを罵倒し続けた者も、批判のカルマによって容色が衰え、形状が変化して、湖の下にあり大きな蓮華のある憤怒天へと転生

したのである。
しかし、この憤怒天という言葉は本来は正しくはない。実際は、「意識堕落愛欲神天」というのが正しいのである。

第四の啓示　人間界へ、性交と怠惰

◉ その一　貯蓄の始まり

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

第二天界、第一天界の神々の中には、怠惰な者がいたのである。そこで、彼は、

このように考えたのである。
「どうしてわたしは、朝食や夕食のために朝夕米を運ばなければならないのだろうか。これを一度に運んだらどうだろうか。」
と。
そこで、彼は夕食と朝食の米を、一度に運んだのである。そして、ある神が彼の所を訪れた。

「さあ、米を食べに行こう。」
「もういいんだ。僕は朝食と夕食の米を一度に運んだんだ。」
この話を聞いたやはり怠惰な神は、同様に今度は一度に二日分の米を運んだのである。
このようにして、怠惰な神々は二日分、四日分、八日分とまとめて米を運ぶようになったのである。

このようにして、貯蓄が始まったのである。そして、第二天界、第一天界において、性交にふける神々が現われ、かつ米を何日分も蓄えて生活するようになった段階で、貪りの心の強い神々は容色もかなり衰え、身体の形状が変化して天界から落ち、この人間界へと転生したのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、あなたは現在この貯蓄というものを一つの美徳と考えているが、しかし本来それはあなたを堕落させるものだったのである。

そこで、いにしえより聖者といわれる魂は、この貯蓄というものを禁じたのである。

そして、このようないきさつを知るならば、あなたはこの人間の世界に生を受

けたことを賛美できるであろうか。
よって、あなたは聖者の言葉に耳を傾けなければならないのである。

◉その二　苦しみだけの世界

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。
この転生のプロセスは、言い換えれば徳がなくなっていくプロセスなのである。

したがって、あなたが住むこの人間界というものが、功徳という点においていかに低い世界であるかをここで認識しなければならない。

もし、そうではなく、この人間の世界を礼賛するものがあるとするならば、それは大変誤った見解である。しかも、それはさらにあなたを堕落に導き、不幸に陥れる考えであるということができよう。

これが、真理を知る智慧者の考えである。そして、わたしはそれを説く者なのである。

よって、あなたは謙虚さをもって、よく耳を傾けるべきである。

＊

人間界へと落下した者たちは、第二天界、第一天界にあった米を食べることはできず、米ぬかやもみがらがあって、刈

り取られたら長い間生えることのない米を栽培し、食べなければならなかった。そこで人々は集まり、泣き叫んだのである。

「ああ、邪悪な法則が衆生の間に出現したものだ。

我々は以前、意識から成り立ち、喜びを食べ、自ら光を放ち、空中を飛行し、至福の状態で存在しながら、大変長い間

とどまっていた。
ところがあるとき、『地の味』が水中に均一になった。それは、色彩や香り、そして味があった。そこで、我々は『地の味』を手でちぎり取って食べ始めたのだ。すると、我々が自ら放つ光が消えたのである。
自らが放つ光が消えたとき、月と太陽がはっきりと出現した。そして、月と太

陽、恒星と惑星、夜と昼、半月とひと月、季節の周期が認識し理解されたのだ。

そして、我々は『地の味』を食べ物とし、栄養とし、久しくとどまっていたが、邪悪な善からぬ法が出現し、『地の味』は消えたのである。

『地の味』が消えたとき、『地の餅』が出現した。そして、同じように、我々はそれを食べ物とし、栄養としていたが、

邪悪な善からぬ法が出現し、『地の餅』は消えたのである。
このように、次には蔓草が、次には耕す必要もなく、そのまま食べられる米が出現した。しかし、それらは同じように善からぬ法のために消え、今や我々の前には、米ぬかやもみがらがあり、刈り取られると栽培しなければ生えることがない米が残ったのである。」

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、あなたはここで知らなければならない。

それは、今では、米に米ぬかやもみがらがあることを嘆く者はどこにもいないということである。つまり、もはや人間はそれを当たり前と考えるために、何の疑問も悲しみも感じることができないのである。

そして、人間はそのような徳のない食べ物を喜び、食道楽やグルメといった楽しみを形にしてきたのである。果たしてこれは、哀れなことであろうか、それとも哀れではないことであろうか。

これが高い世界の記憶を失うことの恐怖である。

人間界の常識というものは、あなたを決してより多くの楽しみと喜びのある高

い世界へ導くことはない。それはあなたをこの世界へと固定し、真実を見えなくさせ、やがてはさらに低い世界へと陥れるものなのである。
よって、天から降りてきた者や、少しでも高い世界の記憶を持つ者にとっては、人間の世界は苦しみだけの世界となるのである。

◉その三 盗み、罰が加えられる

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

こうして、人間界に転生した者たちは、自分が食べる米を栽培しなければならなくなったのだ。そして、米を分け、土地の境界を定めて所有するようになったのである。

「さあ、米を分けよう。境界を決めよう。」と。これが労働の始まりであり、所有の始まりである。

そのとき、ある意地汚い者が、自らの分け前を保持しながら、与えられていない分け前を取って食べた。そこで、人々は彼を捕らえた。

「ああ、友よ、邪悪なことをなしたものだ。さあ、二度とこのようなことをなし

てはならない。」

「わかりました、友よ。」

と、その者は応えたのである。

しかし、この意地汚い者は二度、三度と自らの分け前を保持しながら、与えられていない分け前を取って食べたのである。

そこで、人々は彼を捕らえ、彼に罰を加えたのである。彼は手や土の塊やこん

棒で打たれたのだった。
このように、ここで人々の間に、盗み・非難・嘘、そして刑罰が認識し理解されたのである。
人々は集まった。集まって泣き叫んだ。
「ああ、友よ、邪悪な法則が出現したものだ。」
と。
しかし、衆生よ、そして高貴なる魂よ、

今このことを嘆き悲しむ者がいるであろうか。

◉その四　身分・階級の発生

やがて人々は、彼らの中で、より容姿や見た目が良く、感じの良い、偉大なる能力がある一人の者を選び、その者に文句や非難、追放を決定する権限を与え、それに対する報酬を与えることにしたの

である。
この「大勢の人々の中から選ばれた者」というのが、「偉大な崇拝の対象」のことであり、ここで「偉大な崇拝の対象」という第一の言葉が生じたのである。
また、「田畑の主」というのが、武人のことであり、ここで「武人」という第二の言葉が生じたのである。
そして、「法則によって他人を喜ばせ

る」というのが、国王のことであり、ここで「国王」という第三の言葉が生じたのである。

これが、武人階級という集団の誕生なのである。

◉ その五 祭司・庶民・奴隷などの階級

さて、ある者たちに、このような思いが生じた。

「ああ、邪悪な法則が出現したものだ。盗みが、非難が、嘘や刑罰が、追放が認識し理解されたのだ。我々は邪悪な善からぬ法則を追い払おう。」

と。そこで、彼らはこの法則を追い払った。

この「邪悪な善からぬ法を追い払う」というのが、祭司のことであり、ここで「祭司」という第一の言葉が生じたので

ある。

また、ある者たちは森の境域に草ぶきの小屋を作り、そこで瞑想と思索を始めた。そこには、炭火も煙も杵もなかった。

そこで、彼らは夕方と早朝に、村や町や王都に行き、食物を求めるのであった。

そして、再び草ぶきの小屋に戻り、瞑想と思索を繰り返したのである。

この「瞑想と思索をする」というのが、

灯明を灯す者、すなわち静慮者のことであり、ここで「静慮者」という第二の言葉が生じたのである。
　また、ある者たちはその瞑想と思索はできず、村の近くや町の近くに退いて、経典を作って読む。そこで、人は彼を見て、このように言った。
「この者たちは、瞑想と思索はできず経典を作って読む。今や彼らは静慮しない。」

と。

この「今や彼らは静慮しない」というのが、学者のことであり、ここで「学者」という第三の言葉が生じたのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、この学者という階級は、その当時卑しいと見なされていたのである。しかし、現在では最上と見なされているのである。

これが、祭司階級の誕生なのである。

一方、別のある者は、性交を記憶実践して、個々の職業に従事した。

ここで、「性交を記憶実践して、個々の職業に従事する」というのが、庶民のことであり、ここで「庶民」という言葉が生じたのである。

これが庶民階級の誕生なのである。

そして、残りの者たちは、猟師を営むようになった。

この、殺生という下劣な営みである「猟師の営み」をなす者が、奴隷のことであり、ここで「奴隷」という言葉が生じたのだ。

これが、奴隷階級の誕生なのである。

このようにして、様々な階級が誕生したのである。そして、これ以外に階級というのは存在しないのである。なぜならば、過去・現在・未来を通してこの法則以

上のものは存在しないからである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

このようにして、現在よく知られている様々な階級と役割が生じたのである。しかし、果たしてそれは、望ましいものであろうか。

あなたの今住む世界をよく見てみるが

よい。よく観察するがよい。そこに生きる人々の心をよく考えるがよい。
結局それは、人の権力や地位に対する欲求を刺激し、それを得たときには要らぬプライドの満足を生じさせ、凡夫が凡夫を裁くことをよしとする考えをはびこらせ、この世界に対する誤った信頼を形成させただけなのである。
そして、このように生じたものをたと

えあなたが得ることがあっても、それによってあなたが幸福になることはないのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、あなたはここで理解しなければならない。

それは、現代の社会における競争も名誉も、本来価値がないのだということなのである。

第五の啓示　帰還――永久の至福へ

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

一切は無常である。このように形成された人間の世界も、転輪聖王の登場の後、転輪聖王が現われなくなり、天界の祝福が注がれなくなると、悪がはびこり、や

がて餓鬼・動物・地獄という「三悪趣」の世界が形成されるのである。

よって、現在この人間界には前生高い世界にいた者もいれば悪趣から転生してきた者もいるということなのである。

ところで、この人間界に転生した魂の中には、この高い世界の前生を潜在意識においてぼんやりと記憶している魂がいるのだ。

この魂にとって、つまり天から降りてきた魂にとって、この人間界はまさに喜びや楽しみの少ない世界、苦しみと悲しみだけの世界ということができよう。

このような魂は、やがてこの人間界を支配するものが「三苦」であるということを理解するのである。

すなわち、「痛みや、あるいは生まれながらの肉体の欠陥といった本質的な苦

しみ」「得ていた幸福が壊れさる『変化』という苦しみ」そして「求めたものが手に入らないという苦しみ」――この三つの苦しみである。

よって、これらの崇高な魂は、「変化しないもの・絶対的なもの・本質的なもの」を求めて、この人間界の風習や、観念、常識を放棄し、出離し、「修行」の道に入るのである。

＊

ところがである。衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

そのためには、真に生死、生まれる前、死後、大宇宙の創世、魂の流転——これら一切を知り、知るだけではなく体現し、超越し、それを他の魂に説き明かすことのできる選ばれた魂が登場しなければならないのである。

ところが、そのような魂がこの人間界に登場することはまれなことであり、しかもその魂をそのような魂であると認めることは、迷妄や錯覚、あるいは人間界の常識といったものにとらわれた者たちにとって、至難の技なのである。

なぜならば、人間界とは、悪趣から転生した者にとっては、喜びや楽しみの多い世界だからである。

そして、またこの人間界には、利得や供養や名声を得ようとして、邪法を展開し、この世をいたずらに礼賛し、人間を神として礼賛し、低い世界の喜びに人を縛り付けようとする、善からぬ魂が数限りなく現われるからなのである。

よって、大変長い間――いや、実際は大宇宙の創世のプロセスから見れば、一瞬のことなのであるが――ごくまれに覚

者、悟れる者とされる魂が登場する時を除いては、この苦界、人間界を出離する道は閉ざされていたのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

無常を知りなさい。そして、楽の裏にある苦を知りなさい。そして、この人間界が実に低い、本質的に苦しみの世界であることを知りなさい。そして、聖なる

修行の道に入りなさい。

わたしは、あなたにそれを告げるために、その道を開くために、この人間界に降りてきたのである。迷妄に覆われ、愛欲に憑かれたあなたに、真の至福、自由、喜悦、そして安らぎを与えるために、この世界に降りてきたのである。

＊

わたしは、あなたを導こう。
偽りの喜びと苦しみしか存在しないこの世界からあなたを出離させるために、わたしはあなたに多くの法則を説き明かそう。
もっともっと素晴らしい、多くの喜びが存在する世界へあなたをいざなうために、わたしはわたしのすべてを捧げよう。
それが、わたしのグルであり、すべての

魂の済度を願っておられるシヴァ大神、
諸々の真理勝者、諸々の覚者方のご意思
なのである。

すべての魂の苦悩が、わたしの内側に
内在することをここに願って。

ヴァジラ・ナマ・マハー・グル・シヴァ・
サティアン

◉

久遠の道、天への道

真理勝者は、時を選び、場所を選び、天への道を語るのである。

その一　天へと向かう聖なる実践

◉実在する神々の世界

人間の寿命は、わずか八十年である。もちろん、その寿命を全うできない人もいるし、あるいはその八十年より若干長く生き、まあ、例えば百五十年ぐらい生きる人もいるかもしれない。しかし、せいぜいが百五十年である。

ところが、第一天界の寿命は、九百万年といわれている。そして、第二天界はその四倍、第三天界はその十六倍、第四天界はその六十四倍、第五天界はその約二百五十倍、第六天界はその約一千倍といわれている。

これらの天界の内容は、日本の仏教においてあまりはっきりとした形で表現さ

れていなかった。しかし、わたしの前生の経験と、そして南伝仏教の翻訳によって、はっきりとした形で、今、その全貌がつかめるようになってきている。

そして、その世界観は、間違いなく心の現われであり、もし唯心的、つまり心によって世界が形成されているとするならば、その世界は間違いなく存在すると考えた方が妥当である。

例えば、例を挙げるならば、オウム真理教の高いステージの人たちが、人を飲み込んだヴィジョン、あるいは人に飲み込まれたヴィジョンというのを見ている。これは、飲み込むヴィジョンの対象は何かというと、神であると。

そして、これを実際に、飲み込まれる者の大きさと、飲み込む者の大きさの比によって計算するならば、第一天界と同じように、飲み込む神の大きさは二百五十メーターと。飲み込まれる者の大きさは、まあ、一般の人の大きさで十分であるということになる。

わたしが、なぜ今日こんな、まあ、一風変わった話から入ってるかというと、

神の世界は、わたしたちが今見ている動物の世界と同様、存在するのだということを皆さんにお話ししたいからである。そして、それを前生の経験によって経験している人たちが、オウム真理教においては多く存在するのであるということである。

◉転生の条件——第一天界から第六天界まで

では、第一天界へは、どのような魂が転生するのだろうかと。あるいは、第二天界へは、どのような魂が転生するのだろうかと。あるいは、第三天界へは、どのような魂が転生するのだろうかと。そして、第四天界へは、第五天界へは、第六天界へは、あるいは第六天界以上には、どのような魂が転生するのだろうかと。その話を皆さんにすることにより、皆さんが何をなせば天へ至れ、そして何をなせば悪趣へと落ちるかの話をしたいと。

実際、天へ至るためには、布施、そして戒律の遵守、この二つの条件のもとに、次の条件を満たすならば、必ずや天に至ることができると。

まず、第一天界へ至るためには、布施、プラス持戒、プラス、例えば会社を経営している人が、あるいは国家の運営に携わっている者が、しっかりとその人の約束を全うし、そして部下に対して、あるいは国民に対して、大きな恩恵を与えると。このような魂が、死後第一天界へと転生する。

この第一天界には、四つのパートがあり、その四つのパートの一つが、今言ったとおり、布施、プラス持戒、プラス事業、あるいは国家の運営に携わり、そこに関与する人たちを幸福にした場合、転生できる世界なのである。

第一天界の第二のパートは、成長天といい、これは布施、プラス持戒、プラス生き物を慈しむと。そして、木々、あるいは小動物に至っても殺さず、慈しみの心を持つと。このような魂が、第一天界の第二パートへと転生するのである。

では、第一天界の第三パートはどうかというと、これは布施、プラス持戒、プ

ラス、ドクターが一生懸命病気を治し、そして多くの魂の傷を癒したと。あるいは、軍隊が自国民に傷を付けないように、体を張って戦ったと。こういう場合に行く世界。これが、第一天界の第三パートである。

そして、第一天界の第四パートはどういう世界かというと、これは、例えば干ばつや、あるいは洪水といった多くの天災、この天災を密教的技法によって食い止めることのできた魂。この魂が第一天界へ生まれ変わるのである。

つまり、整理をすると、布施、持戒を土台とし、事業や国家の運営において、しっかりとした仕事をなし、そして関係する人たちに多くの利益を与えた者。次に、生き物を慈しみ傷付けず、その成長に携わった者。次に、自分と関係のある魂の肉体に傷を付けないように努力する、あるいは傷付いた者をしっかりと治した者。そして第四のパートは、天候の正常な状態を祈り、五穀豊饒の状態を導いた者。これらが、第一天界へ生まれ変わるのである。

では、第二天界へは、どのようにしたら生まれ変わるのかというと、これは有

能神の世界といい、この現世の才能を救済に役立てた者、この魂が第二天界へ生まれ変わるのである。

例えば、文章のうまく書ける人が、その文章を書くことによって救済活動のお手伝いをしたと。あるいは、絵をかける人が、その絵をかくことによって救済活動のお手伝いをした等々、こういう魂が、布施、持戒とともに自己の才能を救済に役立てた場合、行く世界、この世界が第二天界である。

では、第三天界へはどのようにしたら行けるのかというと、これは、この人間の世界だけではなく、死の世界、この死の世界に対して、しっかりと功徳を積んだ者ということになる。

死の世界について、しっかりとした功徳を積むというのはどういうことかというと、例えばオウム真理教のように、真理の団体に対して入信をさせると。入信をさせることによって、例えば自分と縁のある魂が正しい輪廻転生を行なうと。そのような導きをなした者、多くの導きをなした者、これが第三天界へと生まれ

変わると。

では、第四天界へはどのような魂が生まれ変わるのかというと、これは、これら三つの条件に加え、心の冷淡さをなくし、四無量心の心をもって接した者。ということは、つまり多くの魂に真理の説法をなした者。この説法をなした者が、第四天界へと生まれ変わるのである。

そして、第五天界は、修行で身につけた神通によって、個人個人の済度をなした者。

第六天界は、その神通によって、多くの魂を一気に済度した者ということになる。

しかし、この六つの世界は欲の世界であって、貪りを持っていてもよろしいということになっている。そして、貪りを離れた者が、これら六つの条件の一つ、あるいは二つ、あるいは六つ全部を備えたならば、それは梵天界、今オウム真理教の正確な訳語では、神聖天、つまり神の聖の天界へと転生することになる。

つまり、はっきりと、これをなせばこの世界へ生まれ変わると、あれをなせばあの世界へ生まれ変わるという教えが存在しているのだということを皆さんは理解しなければならない。

◉苦楽は心の現われ

では、布施をなし、そういう要素はあるんだけども、戒律を破った場合、どこの世界へ生まれ変わるんだと。この魂は、阿修羅の世界へ生まれ変わるのである。阿修羅の世界へ生まれ変わり、そして神と同様の美しさを持ち、そして若干寿命はエネルギーを漏らすがゆえに落ちるけども、ほとんど変わらない生活をする。

では、悪趣へは、どのようにしたら生まれ変わるのかと。悪趣へ生まれ変わる条件は、いろいろな味著、つまり「味」に対する執着によって、それが生起されるのである。ここでいう味とは、食べ物の味だけではない。例えば、感覚的なフィー

リングもそうであるし、あるいは好きな音楽等、あるいは視覚的なもの、つまり五感に関するものすべてが三悪趣へ落ちる導きなのである。

例えば、発酵したものを好む者は、まあ、それと連動して腐ったもの、腐ったものにね、まとわり付く虫とかに転生すると。あるいは、貪りの心が強くて、そして対象に対して布施の心のない者は、その心の働きによって、火元素優位の餓鬼の世界へと転生する。あるいは、心に嫌悪の修習をした者は、孤独な世界、無限の闇の地獄へと転生する等々がそれである。

つまり、仏教観の背景にあるものは何かというと、心が即、その社会を形成するということである。

もちろん、今生きている、この瞬間瞬間、この瞬間瞬間も、心の現われによってわたしたちは苦楽を経験することになる。ということは、真理の実践を日々行ない、教学をし、そして真面目に修行に取り組んでいるならば、この現実の生活だけではなく、来世も良くなるということである。

◉幸福への土台作りを

では一体、何をなせば絶対的な幸福に至り、そして未来際において、必ずや色界へ到達し、無色界へ到達し、マハー・ニルヴァーナへと到達するのだろうかと。これは、「四つの預流支」以外に存在しない。

では、四つの預流支とは何かというと、まず第一は、三宝に対する帰依である。オウム真理教では、この三宝とは、グル、真理、そして教団ということになる。このグルと真理と教団に対して、まず帰依をすること。つまり、自分の生き方の根本をこの三つに置くこと。これが第一の預流支である。

そして、第二の預流支は、その教え、この教えをたくさん聴き、あるいはたくさん読み、そこで記憶を修習すると。これが第二番目の預流支である。

そして、第三番目の預流支は、その記憶したものをもとに、自分自身の身・口・意の三つの業を分析すると。そしてそこで、心において考え修正すると。例えば、

悪いところについては、ザンゲをなし、良いところについては、もっと伸ばそうと努力すると。これが第三番目の預流支である。
そして、第四番目の預流支は、その考えたものを実践するということである。つまりこれは、例えばこの福岡から東京へ至ろうとすると。そのとき、いろんな人が、こっちの道が正しいよ、こっちの道が正しいよと、ね、例えばまあ、十人の人がそう言ってたと。十、違った道を提唱したと。その、どの人を信じるかということが、第一番目の預流支である。これを三宝にしなさいよということである。
で、第二番目は、まず信じたならば、その人の言っている道筋をひたすら記憶しなさいと。そこで、自分はこの道は好きだとか嫌いだとか考えないで記憶しなさいということである。
第三番目は、記憶した道を、次は検討しなさいよということである。例えば、もし途中で山道があり、ね、冬であるならば凍結するかもしれないから、チェー

ンを持っていく必要があるなとか、あるいは一方通行があるならば、どっちの方向から入ろうかとかね、そういうことを検討する。これが、第三番目の預流支であると。

そして、第四番目の預流支は、その記憶し検討した道を、しっかりと進みなさいよということである。

◉すべては四預流支から

もちろん、今、この自分自身の時点から、マハー・ニルヴァーナへ至る地図がはっきりと存在してるわけだから、それを知っている三宝に対して帰依をし、そしてその道筋である経典を記憶し、そしてその経典にのっとり、自分自身の三つのカルマ、つまり口のカルマ、心のカルマ、身のカルマについて検討し、そして第四番目にそれを修正するならば、当然いかなる人でも、ニルヴァーナ、そして

マハー・ニルヴァーナへと到達するはずである。
そして、この四つの預流支の最後は、「聖なる八支の道」を含んでいるし、あるいは「七覚支」を含んでいるし、あるいは「五根五力」を含んでいるし、あるいは「二正勤二正断」を含んでいるし、あるいは「四如意足」を含んでいるということになる。
つまり、四預流支は、初めであり、最後であり、すべてなのである。
これを皆さんが一生懸命実践なさり、そして天の道へ、少なくとも人間以上の世界へ生まれ変わらんことを願い、今日の講話の最後としたいと思います。

（九一年二月十一日　福岡において語る）

その二　高い世界へのデータの具足を

◉たった一つの正しい道

この人生をどのように生きたらいいか、そしてその正しい答えを見いだすこと、これが真の智慧ある魂の生き方である。このような質問をすると、「多くの生き方、多くの道があっていいはずだ」と答える人も多いかもしれない。

しかし、実際は、たった一つの正しい道しか存在しない。それは、どのような生き方かというと、正しいものを具足する、正しいものを身につける生き方ということになる。

この「正しい」という言葉の定義をしっかりと行なわないと、ただ単にいろい

ろな書物に出てくる、例えば「正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定」といったような、言葉のトリックにごまかされがちである。よってここで、正しく「正しい」という言葉を定義しよう。

ここでいう「正しい」とは、地獄・動物・餓鬼というわたしたちを不幸の世界へいざなう、そういう世界へ生まれ変わらないために、データを取り除き、そして、少なくとも人間、あるいは人間以上の怒りの天界、そして戯忘の天界、そして神聖天といったような天界のデータを根付かせていくということである。

◉「具足」とは?

例えば、例を挙げよう。小さいときからいろいろな情報を入れ、そして結婚の適齢期へと入っていくと。このとき、男性にしろ女性にしろ、対象となる結婚相手を探す。ある人はスタイルのいい人、ある人はグラマーな人と。あるいは、あ

る人は知的な人、ある人はお金持ちの人がいいといったような形で規定してくると。

これはどういうことかというと、その人が小さいときからいろいろな情報を収集し、そこで喜んだり悲しんだりという繰り返しを行ないながら、その人の性格的な傾向が決定されていっている、そしてその延長上に対象となるものが現われてくるわけである。

例えば、現代のように性的な情報が氾濫している場合、当然、性的な喜びを与えてくれる対象ということで、その対象が限定されよう。

そして、例えば女性がお金によって喜ばせてくれるということでお金持ちを選んだ場合、そのお金持ちの性格がねじ曲がっていたら、当然、お金による幸福は得られるかもしれないが、その他にその対象から与えられる苦しみというものによって苦しまなければならなくなる。

同じように、小さい頃から性欲のデータを繰り返し繰り返し入れ、そして中学、

高校、大学と進み、そして性的遊びに翻弄され、対象となるものと結婚すると。当然、その対象は性的なもの、外見が優位となろう。そこで与えてくれるものは性的快楽であり、そして、その対象となる女性の持っている悪い性格によって苦しまなければならなくなると。

このような傾向の決定、これが仏教の言葉を使うならば「具足」なのである。具足とはどういう意味かというと、備わり付け足されたもの、つまり、魂の本質ではなく、その人の傾向によって備わってきたものということになる。

もっと他の例を挙げよう。例えば、ある魂が生まれ、その魂の周りの環境がブルー一色であったと。あるいは父や母、兄弟たちがブルーを好んだと。当然、その魂もブルーという色に対して喜びを感じ、そしてそれを何度も何度も修習することによって、愛著、つまりブルーに対する執着が決定すると。それによって、例えばその人の使う色はブルーであると。その人の着る洋服の色はブルーであると。あるいは、その人の買う車の色はブルーであるということになる。これが具

足なのである。
そして、この具足を人間界以上の世界へと規定していくこと、これが、この人生を正しく生きる生き方なのである。
では、そのためには何をどうなさなければならないのかと。それはまず人間界、憤怒天、あるいは戯忘天といった世界を正確に知り、そこでの神々はどのような特質を備えているかということを理解し、そして完全に自分のものになるまで修習、つまり繰り返し繰り返しそれをデータとして根付かせることである。それをなすことによってのみ、わたしたちはその世界へ生まれ変わることができる。
これはちょうど、全く泳ぎのできなかった者が、水泳のうまい人のフォームを見、呼吸の仕方を見、そして、それをまねて泳げるようになるのと同じである。
つまり、高い世界へ至った魂が、どのような生き方をし、どのような考え方を持ち、そして、どのような実践をしたかということを正確に理解することにより、そして、それをまねることにより、わたしたちも高い世界へ生まれることができ

るわけである。
　また、これと同じように、仏陀、つまり目覚めた人、この欲界、それから形状界、そこから非形状界という、この三つの世界を完全に知り自在となるためには、同じようにどのような知識を得、どのような傾向を持ち、そして、どのような修習をなしたらいいかということ、これをしっかりと学び、実践することにより、同じように覚者の境地へと到達するわけである。

◉二つの土台──布施・持戒

　では、高い世界へ生まれ変わるためには一体どのようにしたらいいのかと。まず仏典をひも解いてみよう。
　これは、信徒の皆さんには『マハーヤーナ』にも載っていたとおり、まず福田である「聖なる八支の道」、あるいは「十の徹底」、あるいは「六つの徹底」といっ

たものを徹底的に行なっている者たちに対しての布施、奉仕、そしてわたしたちを悪趣へと至らせないための持戒を守るということ、この二つが土台となろう。

では、この二つは一体どのような形で、わたしたちを上の世界へ結び付けてくれるのかというと、まず、布施の徹底というものは、わたしたちの心における貪り、この貪りの傾向を弱めるがゆえに餓鬼の世界への転生をなくすということになる。

そして、奉仕の徹底は自己の利益、他の利益という小さな枠組みではなく、大きな枠組みでものを見ることができるようになるという心を培い、形成することになり、これも同じように餓鬼の世界への転生を捨断することになる。

では、持戒についてはどうだろうかと。例えば、殺生をしないという持戒がある。この殺生をしないという持戒は、その殺生の背景にある邪悪な心、この邪悪な心を捨断する。邪悪な心を捨断するがゆえに、当然、地獄への道をシャットアウトすることになる。

では、偸盗についてはどうであろうか。この偸盗、盗みというのは先程も述べた貪りの心を増大する。貪りの心というものが背景となると。よってこれをシャットアウトすることにより、餓鬼の世界への転生はなくなる。

では、意味のないセックス、これについてはどうであろうかと。これは動物の世界を見ればよくわかることだが、要するに盛り、つまりエネルギーの変化による盛り、これに感応し対象はどうでもよくなり、お互いにオスとメスが求め合うと。そして交わると。人間界においても同じことが言えていて、性欲のデータを入れると。それに刺激され交わると。このような傾向を強めていると、来世は動物へ落ちると。よって、愛のない性的交わりを捨断すると。これは動物の世界への転生を防ぐ道であると。

では、次の妄語、つまり嘘、これについてのシャットアウト。これはわたしたちに、どのような傾向を与えてくれるだろうかと。これは、嘘というものはもともと自己の心に覆いをかぶせる作業である。この嘘の修習をすることにより、対

象に対する認識の仕方が甘くなり、対象を認識できないだけではなく、自分自身も認識できなくなると。よって、この傾向をシャットアウトすることは、本質的な無智である動物の世界のシャットアウト、そして意図的な無智である天界のシャットアウトということになる。

では、最後の酒を飲まない、あるいはタバコを吸わない、あるいはマリファナを吸わない、LSDをやらない、シンナー遊びをやらないといったような、薬物による心を散乱にするものから解放するということは、一体どういうことであろうかと。これはわたしたちの集中力を強め、そして思念の力を強め、思念優位である怒りの天界、あるいは戯忘の天界へと転生し、あるいは貪りが完全になくなることによって神聖天へと転生することになると。

この布施・奉仕・持戒の実践は、よってわたしたちを高い世界へと導くことになる。

◉貪・瞋・癡からの解放——開かれる天への道

では、これらの土台をもっと強くするためには、あるいは、これらの土台をもっと大きくするためには、どのようにしたらいいのかと。それは、正記憶修習であると。では、一体何を記憶修習するんだと。それは、この欲六界の構成をしっかりと知ること、そして、自分が生まれ変わりたい世界を規定し、そこに思念を加え、そしてそのデータを何度も何度も取り込むことと。

例えば仏陀に至るためには、まず迷妄、迷妄をシャットアウトするためには、六識をシャットアウトすると。六識をシャットアウトするためには、名色をシャットアウトしなければならないと。名色とは何かというと、五蘊であると。五蘊をシャットアウトするためには、当然、六つの感覚器官、これをシャットアウトしなければならないと。六つの感覚器官をシャットアウトするためには、当然、外界をシャットアウトしなければならないと。

これらをなすことにより、まず好むという感情が止滅すると。好むという感情が止滅することにより、とらわれの心が止滅する。とらわれの心が止滅するがゆえに、貪りが止滅し、あるいはその対称である嫌悪が止滅すると。そしてこの対称である貪り、嫌悪が止滅するがゆえに欲界の転生がないと。欲界での転生がなくなればどうなるかと。心は神聖となり、三昧に入り、そして神聖天へと転生することになる。神聖天へと転生した場合、心の乱れが生じない限り、その神聖天でね、永遠に近いぐらい長きにわたって、幸福な時を過ごすことができると。

例えばこのように、「十二縁起の理法」一つを繰り返し繰り返し行なうだけで、自分自身の心に生じてくる迷妄、これは無智だね、要するに。嫌悪、これは邪悪な心だね。そして愛著、つまり対象に対する必要以上の情熱、これはまあ、貪りの裏表であるわけだけども、このような感情を生起させることが、つまり、起き上がらせることが、自分にとって決してプラスではないんだということが認識できるようになる。

そして、認識できるようになれば、徐々にその傾向は弱まり、止まっていくと。止まっていくがゆえに、この貪・瞋・癡の最も強い地獄、これは嫌悪だね。動物、これは迷妄、無智だね。そして貪りという餓鬼、この三つから解放され、おのずと人間、憤怒天、戯忘天、神聖天、あるいは光音天、あるいは色究竟天、あるいは非形状界、そしてマハー・ニルヴァーナへと入っていくことになると。

◉「正記憶修習」こそ、到達点への早道

では、具体的にどのようなものをしっかりと具足すれば、その到達点に早く到達できるのかと。

これは、まず第一は、乗り物の選択ということになる。つまり、自分たちを真理によって、あるいはタントラ・ヴァジラヤーナの仏法によって、その乗り物に乗っかり、悪業をできるだけ早く消滅していただき、早く対象となる世界へと没

入するんだと考える人は、まず帰依の修行から始めなければならない。
当然、この帰依の修行のやり方には、帰依マントラやあるいは立位礼拝もあると。しかし、それはあくまでも、わたしはその船に乗りたいと、わたしはその船に乗りますという宣誓であって、実際乗ったことにはならないと。
では何をもって乗ったことになるかと。これは実際、その対象の教えをしっかりと学び、そして奉仕・布施の実践を行なうことによって、その乗り物に乗ったということになる。これはどういうことかというと、その乗り物の構造がどういうものであって、そして、その乗り物はどういうふうな方向によって、対象である天界や、あるいはマハー・ニルヴァーナへと導いてくれるのかというマップを、地図をね、しっかりと理解すると。そして、お布施というのは、要するにチケットを買うと、結び付きを強めるということが目的となると。
そして、そこへ乗ったならば、次はその乗り物のスピードを加速すると。
では、どのようにしたら、乗り物のスピードを加速することができるのかと。

これは、その教えを何度も何度も記憶するということである。
よく「わたしは八正道を知ってるよ」、よく「わたしは七覚支を知ってるよ」と言う人がいる。言ってごらん。「正見解、正思惟、正語、正行為、正生活、正記憶修習、正精進、それから正サマディです」と。ああそうかと、よく知ってるねと。ではその意味は？「意味ですか？ 正見解、云々」と。「正思惟、云々」と説明をなされると。実践できてるのかなと。「いや実践はできてないです」と。
この「知ってる」から「実践しようと思ってるんだけどできないんです」まで「実践しようと思ってるんだけどできないんです」と。の距離、これはかなりのものがある。
では、どのようにしたら、その距離を縮めることができるのかというと、そこで登場するのが正記憶修習である。つまり、データを一度入れ記憶するのではなく、何度も何度もそのデータを入れ、自分のものにしてしまうと。そして、もう一歩進めて、自分自身の傾向を分析し、その正記憶修習のデータと自分自身の身

の行ない、口の行ない、心の働きと対照し、そして自分の傾向を完全に弱め、高い世界への道筋へと、ベクトルの向きを変えると。そして最終的には、その記憶修習し、思索したものを土台とし、身・口・意における実践を行なうと。

これをなすならば、必ずやいかなる人でも、今、今生においてどんなに悪業を積んだ人でも、時間さえかければ、怒りの世界、あるいは戯忘の世界、あるいは神聖天の世界へと転生することができるはずである。

◉四預流支から具足、そして救済へ

人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられない。特に、今オウム真理教の教団が大きくなってきて、救済の対象が死に行く人、あるいは大変重たい病にかかっている人等に対象が移ってきているように思われる。その際、しっかりと教義を皆さんが根付せていたならば、その教義をその方々に説いてあげるだけで、

大いなる功徳を積むことになろう。

よって、今日この日を境にね、しっかりと正記憶修習、そして、それにのっとり思索、そして実践というプロセスを歩いていただきたいと思います。そして、高い世界へのデータを具足する。

今日はこの四預流支から具足と、ここの部分だけをね、皆さんが理解し記憶していただいたら、今日の講話の目的は十分に果たせたと思います。

（九一年三月十日　名古屋において語る）

समणो पि खो, वासेट्ठ, कायेन द्वयकारी वाचाय द्वयकारी मनसा द्वयकारी विमिस्सदिट्ठिको विमिस्सदिट्ठिकम्मसमादानो विमिस्सदिट्ठिकम्मसमादानहेतु कायस्स भेदा परं मरणा सुखदुक्खप्पटिसंवेदी होति ।

बोधिपक्खियभावना

२८. "खत्तियो पि खो, वासेट्ठ, कायेन संवुतो वाचाय संवुतो मनसा संवुतो, सत्तन्नं बोधिपक्खियानं धम्मानं भावनमन्वाय, दिट्ठेव धम्मे परिनिब्बायति[1] । ब्राह्मणो पि खो, वासेट्ठ ...पे०... वेस्सो पि खो, वासेट्ठ...सुद्दो पि खो, वासेट्ठ...समणो पि खो, वासेट्ठ, कायेन संवुतो वाचाय संवुतो मनसा संवुतो, सत्तन्नं बोधिपक्खियानं भावनमन्वाय, दिट्ठेव धम्मे परिनिब्बायति ।

२९. "इमेसं हि, वासेट्ठ, चतुन्नं वण्णानं यो होति भिक्खु अरहं खीणासवो वुसितवा कतकरणीयो ओहितभारो अनुप्पत्तसदत्थो परिक्खीणभवसंयोजनो सम्मदञ्ञा विमुत्तो, सो नेसं अग्गमक्खायति; धम्मेनेव, नो अधम्मेन । धम्मो हि, वासेट्ठ, सेट्ठो जनेतस्मिं दिट्ठे चेव धम्मे अभिसम्परायं च ।

३०. "ब्रह्मुना पेसा, वासेट्ठ, सनङ्कुमारेन गाथा भासिता –

'खत्तियो सेट्ठो जनेतस्मिं, ये गोत्तपटिसारिनो[2] ।
विज्जाचरणसम्पन्नो[3], सो सेट्ठो देवमानुसे' ति ।।

"सा खो पनेसा, वासेट्ठ, गाथा ब्रह्मुना सनङ्कुमारेन सुगीता नो दुग्गीता, सुभासिता नो दुब्भासिता, अत्थसंहिता[4] नो अनत्थसंहिता, अनुमता मया । अहं पि, वासेट्ठ, एवं वदामि –

'खत्तियो सेट्ठो जनेतस्मिं, ये गोत्तपटिसारिनो ।
विज्जाचरणसम्पन्नो, सो सेट्ठो देवमानुसे' ति ।।

इदमवोच भगवा । अत्तमना वासेट्ठभारद्वाजा भगवतो भासितं अभिनन्दुं ति ।

अग्गञ्ञसुत्तं निट्ठितं चतुत्थं ।

—:०:—

१. परिनिब्बाति – सी० । २. रो० पोत्थके नत्थि । ३. ० पटिसारिणो – रो० । ४. ० सम्पण्णो – सी० । ५. अत्थसञ्हिता – स्या० ।

२५. "अहु खो सो, वासेट्ठ, समयो यं खत्तियो पि सकं धम्मं गरहमानो अगारस्मा अनगारियं पब्बजति – 'समणो भविस्सामी' ति । ब्राह्मणो पि खो[1], वासेट्ठ[1] ...पे०... वेस्सो पि खो, वासेट्ठ ...पे०... सुद्दो पि खो, वासेट्ठ, सकं धम्मं गरहमानो अगारस्मा अनगारियं पब्बजति – 'समणो भविस्सामी' ति । इमेहि खो, वासेट्ठ, चतूहि मण्डलेहि समण-मण्डलस्स अभिनिब्बत्ति अहोसि तेसं येव सत्तानं, अनञ्ञेसं; सदिसानं येव, नो असदिसानं; धम्मेनेव, नो अधम्मेन । धम्मो हि, वासेट्ठ, सेट्ठो जनेतस्मिं दिट्ठे चेव धम्मे अभिसम्परायं च

§ ४. खीणासवो नेसं अग्गमक्खायति

२६. "खत्तियो पि खो, वासेट्ठ, कायेन दुच्चरितं चरित्वा वाचाय दुच्चरितं चरित्वा मनसा दुच्चरितं चरित्वा मिच्छादिट्ठिको मिच्छादिट्ठि-कम्मसमादानो[2] मिच्छादिट्ठिकम्मसमादानहेतु कायस्स भेदा परं मरणा अपायं दुग्गतिं विनिपातं निरयं उपपज्जति । ब्राह्मणो पि खो, वासेट्ठ, ...पे०... वेस्सो पि खो, वासेट्ठ...सुद्दो पि खो, वासेट्ठ ...समणो पि खो, वासेट्ठ, कायेन दुच्चरितं चरित्वा वाचाय दुच्चरितं चरित्वा मनसा दुच्चरितं चरित्वा मिच्छादिट्ठिको मिच्छादिट्ठिकम्मसमादानो मिच्छादिट्ठिकम्म-समादानहेतु कायस्स भेदा परं मरणा अपायं दुग्गतिं विनिपातं निरयं उपपज्जति ।

"खत्तियो पि खो, वासेट्ठ, कायेन सुचरितं चरित्वा वाचाय सुचरितं चरित्वा मनसा सुचरितं चरित्वा सम्मादिट्ठिको सम्मादिट्ठिकम्मसमादानो सम्मादिट्ठिकम्मसमादानहेतु कायस्स भेदा परं मरणा सुगतिं सग्गं लोकं उपपज्जति । ब्राह्मणो पि खो, वासेट्ठ... पे० ...वेस्सो पि खो, वासेट्ठ... सुद्दो पि खो, वासेट्ठ...समणो पि खो, वासेट्ठ, कायेन सुचरितं चरित्वा वाचाय सुचरितं चरित्वा मनसा सुचरितं चरित्वा सम्मादिट्ठिको सम्मादिट्ठिकम्म-समादानो सम्मादिट्ठिकम्मसमादानहेतु कायस्स भेदा परं मरणा सुगतिं सग्गं लोकं उपपज्जति ।

२७. "खत्तियो पि खो, वासेट्ठ, कायेन द्वयकारी वाचाय द्वयकारी मनसा द्वयकारी विमिस्सदिट्ठिको विमिस्सदिट्ठिकम्मसमादानो विमिस्स-दिट्ठिकम्मसमादानहेतु कायस्स भेदा परं मरणा सुखदुक्खप्पटिसंवेदी[3] होति । ब्राह्मणो पि खो, वासेट्ठ ...पे०... वेस्सो पि खो, वासेट्ठ...सुद्दो पि खो, वासेट्ठ...

१-१. रो० पोत्थके नत्थि । २. रो० पोत्थके नत्थि । ३. सुखदुक्खपटिसंवेदी – सी०, स्या० ।

'झायका, झायका' त्वेव दुतियं अक्खरं उपनिब्बत्तं । तेसं येव खो, वासेट्ठ, सत्तानं एकच्चे सत्ता अरञ्ञायतने पण्णकुटीसु तं झानं अनभिसम्भुणमाना[1] गामसामन्तं निगमसामन्तं ओसरित्वा गन्थे[2] करोन्ता अच्छन्ति[3]। तमेनं मनुस्सा दिस्वा एवमाहंसु—'इमे खो, भो, सत्ता अरञ्ञायतने पण्णकुटीसु तं झानं अनभिसम्भुणमाना गामसामन्तं निगमसामन्तं ओसरित्वा गन्थे करोन्ता अच्छन्ति । न दानिमे झायन्ती' ति । न दानिमे झायन्ती 'ति खो, वासेट्ठ, 'अज्झायका[4] अज्झायका' त्वेव ततियं अक्खरं उपनिब्बत्तं । हीनंसम्मतं खो पन, वासेट्ठ, तेन समयेन होति, तदेतरहि सेट्ठसम्मतं । इति खो, वासेट्ठ, एवमेतस्स ब्राह्मणमण्डलस्स पोराणेन अग्गञ्ञेन अक्खरेन अभिनिब्बत्ति अहोसि तेसं येव सत्तानं, अनञ्ञेसं; सदिसानं येव, नो असदिसानं; धम्मेनेव, नो अधम्मेन । धम्मो हि, वासेट्ठ, सेट्ठो जनेतस्मिं दिट्ठे चेव धम्मे अभिसम्परायं च ।

वेस्समण्डलं

२३. "तेसं येव खो, वासेट्ठ, सत्तानं एकच्चे सत्ता मेथुनं धम्मं समादाय विसुकम्मन्ते[5] पयोजेसुं । मेथुनं धम्मं समादाय विसुकम्मन्ते पयोजेन्ती ति खो, वासेट्ठ, 'वेस्सा, वेस्सा' त्वेव अक्खरं उपनिब्बत्तं[6]। इति खो, वासेट्ठ, एवमेतस्स वेस्समण्डलस्स पोराणेन अग्गञ्ञेन अक्खरेन अभिनिब्बत्ति अहोसि तेसं येव सत्तानं, अनञ्ञेसं; सदिसानं येव, नो असदिसानं; धम्मेनेव, नो अधम्मेन । धम्मो हि, वासेट्ठ, सेट्ठो जनेतस्मिं दिट्ठे चेव धम्मे अभिसम्परायं च ।

सुद्दमण्डलं

२४. "तेसं येव खो, वासेट्ठ, सत्तानं ये ते सत्ता अवसेसा ते लुद्दाचारा[7] खुद्दाचारा[8] अहेसुं । लुद्दाचारा खुद्दाचारा ति खो, वासेट्ठ, 'सुद्दा, सुद्दा' त्वेव अक्खरं उपनिब्बत्तं । इति खो, वासेट्ठ, एवमेतस्स सुद्दमण्डलस्स पोराणेन अग्गञ्ञेन अक्खरेन अभिनिब्बत्ति अहोसि तेसं येव सत्तानं, अनञ्ञेसं; सदिसानं येव, नो असदिसानं; धम्मेनेव, नो अधम्मेन । धम्मो हि, वासेट्ठ, सेट्ठो जनेतस्मिं दिट्ठे चेव धम्मे अभिसम्परायं च ।

१. अनभिसम्भुनमाना – स्या०; अनभिसम्भूनमाना – रो० । २. गन्थे – सी०; गण्ठे – स्या० । ३. आगच्छन्ति – स्या०; अच्छेन्ति – रो० । ४. अज्झायिका – स्या० । ५. विसुं कम्मन्ते – स्या०, सी०; विसुतकम्मन्ते – रो० । ६. निब्बत्तं – स्या० । ७. लुद्दाचारा – सी० । ८. रो० पोत्थके नत्थि ।

दस्सनीयतरो च पासादिकतरो च महेसक्खतरो च तं सत्तं उपसङ्कमित्वा एतदवोचुं–'एहि, भो[1] सत्त, सम्मा खीयितब्बं खीय[2], सम्मा गरहितब्बं गरह[3], सम्मा पब्बाजेतब्बं पब्बाजेहि । मयं पन वो[4] सालीनं भागं अनुप्पदस्सामा' ति । 'एवं, भो' ति खो, वासेट्ठ, सो सत्तो तेसं सत्तानं पटिस्सुणित्वा सम्मा खीयितब्बं खीयि, सम्मा गरहितब्बं गरहि, सम्मा पब्बाजेतब्बं पब्बाजेसि । ते पनस्स सालीनं भागं अनुप्पदंसु ।

२१. "महाजनसम्मतो ति खो, वासेट्ठ, 'महासम्मतो, महासम्मतो' त्वेव पठमं अक्खरं उपनिब्बत्तं । खेत्तानं अधिपती ति खो, वासेट्ठ, 'खत्तियो, खत्तियो' त्वेव दुतियं अक्खरं उपनिब्बत्तं । धम्मेन परे[5] रञ्जेती ति खो, वासेट्ठ, 'राजा, राजा' त्वेव ततियं अक्खरं उपनिब्बत्तं । इति खो, वासेट्ठ, एवमेतस्स खत्तियमण्डलस्स पोराणेन अग्गञ्ञेन अक्खरेन अभिनिब्बत्ति अहोसि तेसं येव सत्तानं, अनञ्ञेसं[6]; सदिसानं येव, नो असदिसानं; धम्मेनेव, नो अधम्मेन । धम्मो हि, वासेट्ठ, सेट्ठो जनेतस्मिं दिट्ठे चेव धम्मे अभिसम्परायं च ।

ब्राह्मणमण्डलं

२२. अथ खो तेसं, वासेट्ठ, सत्तानं येव एकच्चानं एतदहोसि – 'पापका वत, भो, धम्मा सत्तेसु पातुभूता, यत्र हि नाम अदिन्नादानं पञ्ञायिस्सति, गरहा पञ्ञायिस्सति, मुसावादो पञ्ञायिस्सति, दण्डादानं पञ्ञायिस्सति, पब्बाजनं पञ्ञायिस्सति । यन्नून मयं पापके अकुसले धम्मे वाहेय्यामा' ति । ते पापके अकुसले धम्मे वाहेसुं[7] । पापके अकुसले धम्मे वाहेन्ती ति खो, वासेट्ठ, 'ब्राह्मणा, ब्राह्मणा' त्वेव पठमं अक्खरं उपनिब्बत्तं । ते अरञ्ञायतने पण्णकुटियो करित्वा पण्णकुटीसु झायन्ति वीतङ्गारा वीतधूमा पन्नमुसला सायं सायमासाय पातो पातरासाय गामनिगमराजधानियो ओसरन्ति घासमेसमाना[8] । ते घासं पटिलभित्वा पुनदेव अरञ्ञायतने पण्णकुटीसु झायन्ति । तमेनं मनुस्सा दिस्वा एवमाहंसु– 'इमे खो, भो, सत्ता अरञ्ञायतने पण्णकुटियो करित्वा पण्णकुटीसु झायन्ति वीतङ्गारा वीतधूमा पन्नमुसला, सायं सायमासाय पातो पातरासाय गामनिगमराजधानियो ओसरन्ति घासमेसमाना । ते घासं पटिलभित्वा पुनदेव अरञ्ञायतने पण्णकुटीसु झायन्ती' ति । झायन्ती ति खो, वासेट्ठ,

१. खो – रो० । २. खीयि – स्या०, रो० । ३. गरहि – रो० । ४. ते – सी०, रो०, म० । ५. परेसं – स्या० । ६. अञ्ञेसं – स्या० । ७. वाहेसुं – रो० । ८. घासमेसना – स्या० ।

तण्डुलप्फलो । यं तं सायं सायमासाय आहराम पातो तं होति पक्कं पटिविरूळ्हं । यं तं पातो पातरासाय आहराम सायं तं होति पक्कं पटिविरूळ्हं । नापदानं पञ्ञायित्थ । ते मयं अकट्ठपाकं सालिं परभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठम्हा । तेसं नो पापकानं येव अकुसलानं धम्मानं पातुभावा कणो पि तण्डुलं परियोनन्धि, थुसो पि तण्डलं परियोनन्धि, लूनं पि नप्पटिविरूळ्हं । अपदानं पञ्ञायित्थ । सण्डसण्डा सालयो ठिता । यन्नून मयं सालिं विभजेय्याम मरियादं ठपेय्यामा' ति !

अदिन्नादानादि पञ्ञायि

१९. "अथ खो ते, वासेट्ठ, सत्ता सालिं विभजिंसु मरियादं ठपेसुं । अथ खो, वासेट्ठ, अञ्ञतरो सत्तो लोलजातिको सकं भागं परिरक्खन्तो अञ्ञतरं भागं अदिन्नं आदियित्वा परिभुञ्जि । तमेनं अग्गहेसुं । गहेत्वा एतदवोचुं– 'पापकं वत, भो सत्त, करोसि यत्र हि नाम सकं भागं परिरक्खन्तो अञ्ञतरं भागं अदिन्नं आदियित्वा परिभुञ्जसि । मास्सु, भो सत्त, पुन पि एवरूपमकासी' ति । 'एवं, भो' ति खो, वासेट्ठ, सो सत्तो तेसं सत्तानं पच्चस्सोसि । दुतियं पि खो, वासेट्ठ, सो सत्तो ... पे० ... ततियं पि खो, वासेट्ठ, सो सत्तो सकं भागं परिरक्खन्तो अञ्ञतरं भागं अदिन्नं आदियित्वा परिभुञ्जि । तमेनं अग्गहेसुं । गहेत्वा एतदवोचुं–'पापकं वत, भो सत्त, करोसि यत्र हि नाम सकं भागं परिरक्खन्तो अञ्ञतरं भागं अदिन्नं आदियित्वा परिभुञ्जसि' । मास्सु, भो सत्त, पुन पि एवरूपमकासी' ति । अञ्ञे पाणिना पहरिंसु, अञ्ञे लेड्डुना[2] पहरिंसु, अञ्ञे दण्डेन पहरिंसु । तदग्गे खो, वासेट्ठ, अदिन्नादानं पञ्ञायति, गरहा पञ्ञायति, मुसावादो पञ्ञायति, दण्डादानं पञ्ञायति ।

महासम्मतराजा सम्मन्नितो

२०. "अथ खो ते, वासेट्ठ, सत्ता सन्निपतिंसु । सन्निपतित्वा अनुत्थुनिंसु – 'पापका वत भो धम्मा सत्तेसु पातुभूता, यत्र हि नाम अदिन्नादानं पञ्ञायिस्सति, गरहा पञ्ञायिस्सति, मुसावादो पञ्ञायिस्सति, दण्डादानं पञ्ञायिस्सति । यन्नून मयं एतं सत्तं सम्मन्नेय्याम यो[3] नो सम्मा खीयितब्बं खीयेय्य, सम्मा गरहितब्बं गरहेय्य, सम्मा पब्बाजेतब्बं पब्बाजेय्य । मयं पनस्स सालीनं भागं अनुप्पदस्सामा' ति ।

"अथ खो ते, वासेट्ठ, सत्ता यो नेसं सत्तो अभिरूपतरो च

१. परिभुञ्जि – स्या० । २. लेड्डुना – स्या० । ३. सो – रो० ।

"अथ खो सो, वासेट्ठ, सत्तो तस्स सत्तस्स दिट्ठानुगतिं आपज्जमानो सालिं आहासि सकिदेव अट्ठाहाय–'एवं पि किर, भो, साधू'ति। यतो खो ते, वासेट्ठ, सत्ता सन्निधिकारकं सालिं उपक्कमिंसु परिभुञ्जितुं, अथ कणो पि तण्डुलं परियोनन्धि, थुसो पि तण्डुलं परियोनन्धि; लूनं पि नप्पटिविरूळ्हं। अपदानं पञ्ञायित्थ। सण्डसण्डा सालयो[1] अट्ठंसु।

सालिविभागो

१८. "अथ खो ते, वासेट्ठ, सत्ता सन्निपतिंसु। सन्निपतित्वा अनुत्थुनिंसु– 'पापका वत, भो, धम्मा सत्तेसु पातुभूता। मयं हि पुब्बे मनोमया अहुम्हा पीतिभक्खा सयंपभा अन्तलिक्खचरा। सुभट्ठायिनो चिरं दीघमद्धानं अट्ठम्हा[2]। तेसं नो अम्हाकं कदाचि करहचि दीघस्स अद्धुनो अच्चयेन रसपथवी उदकस्मिं समतनि। सा अहोसि वण्णसम्पन्ना गन्धसम्पन्ना रससम्पन्ना। ते मयं रसपथविं हत्थेहि आलुप्पकारकं उपक्कमिम्ह परिभुञ्जितुं। तेसं नो रसपथविं हत्थेहि आलुप्पकारकं उपक्कमतं परिभुञ्जितुं सयंपभा अन्तरधायि। ताय अन्तरहिताय चन्दिमसुरिया[3] पातुरहेसुं। चन्दिमसुरियेसु पातुभूतेसु नक्खत्तानि तारकरूपानि पातुरहेसुं। नक्खत्तेसु तारकरूपेसु पातुभूतेसु रत्तिन्दिवा पञ्ञायिंसु। रत्तिन्दिवेसु पञ्ञायमानेसु मासड्ढमासा पञ्ञायिंसु। मासड्ढमासेसु पञ्ञायमानेसु उतुसंवच्छरा पञ्ञायिंसु। ते मयं रसपथविं परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठम्हा। तेसं नो पापकानं येव अकुसलानं धम्मानं पातुभावा रसपथवी अन्तरधायि। रसपथविया अन्तरहिताय भूमिपप्पटको पातुरहोसि। सो अहोसि वण्णसम्पन्नो गन्धसम्पन्नो रससम्पन्नो। ते मयं भूमिपप्पटकं उपक्कमिम्ह परिभुञ्जितुं। ते मयं तं परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठम्हा। तेसं नो पापकानं येव अकुसलानं धम्मानं पातुभावा भूमिपप्पटको अन्तरधायि। भूमिपप्पटके अन्तरहिते पदालता पातुरहोसि। सा अहोसि वण्णसम्पन्ना गन्धसम्पन्ना रससम्पन्ना। ते मयं पदालतं उपक्कमिम्ह परिभुञ्जितुं। ते मयं तं परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठम्हा। तेसं नो पापकानं येव अकुसलानं धम्मानं पातुभावा पदालता[4] अन्तरधायि। पदालताय अन्तरहिताय अकट्ठपाको सालि पातुरहोसि अकणो अथुसो सुद्धो सुगन्धो

१. सालियो – रो०। २. अट्ठम्ह – सी०, रो०। ३. ०सूरिया – म०। ४. बदालता – रो०।

'नस्स असुचि[1], नस्स असुची ति। कथं हि नाम सत्तो सत्तस्स एवरूपं करिस्सती' ति ! तदेतरहि पि मनुस्सा एकच्चेसु जनपदेसु वधुया[2] निब्बुय्हमानाय अञ्ञे पंसुं खिपन्ति, अञ्ञे सेट्ठिं खिपन्ति, अञ्ञे गोमयं खिपन्ति; तदेव पोराणं अग्गञ्ञं अक्खरं अनुसरन्ति, न त्वेवस्स अत्थं आजानन्ति।

मेथुनधम्मसमाचारो

१७. "अधम्मसम्मतं खो पन, वासेट्ठ, तेन समयेन होति तदेतरहि धम्मसम्मतं। ये खो पन, वासेट्ठ, तेन समयेन सत्ता मेथुनं धम्मं पटिसेवन्ति ते मासं पि द्वेमासं पि न लभन्ति गामं वा निगमं वा पविसितुं। यतो खो ते, वासेट्ठ, सत्ता तस्मिं असद्धम्मे अतिवेलं पातब्यतं[3] आपज्जिसु अथ अगारानि उपक्कमिंसु कातुं तस्सेव असद्धम्मस्स पटिच्छादनत्थं। अथ खो, वासेट्ठ, अञ्ञतरस्स सत्तस्स अलसजातिकस्स एतदहोसि – 'अम्भो, किमेवाहं विहञ्ञामि सालिं आहरन्तो सायं सायमासाय पातो पातरासाय ! यन्नूनाहं सालिं आहरेय्यं सकिदेव सायपातरासाया' ति !

"अथ खो सो, वासेट्ठ, सत्तो सालिं आहासि सकिदेव सायपातरासाय। अथ खो, वासेट्ठ, अञ्ञतरो सत्तो येन सो सत्तो तेनुपसङ्कमि; उपसङ्कमित्वा तं सत्तं एतदवोच – 'एहि, भो सत्त, सालाहारं गमिस्सामा' ति।

'अलं, भो सत्त, आहतो[4] मे सालि सकिदेव सायपातरासाया[5]' ति।

"अथ खो सो, वासेट्ठ, सत्तो तस्स सत्तस्स दिट्ठानुगतिं आपज्जमानो सालिं आहासि सकिदेव द्वीहाय–'एवं पि किर, भो, साधू'ति। अथ खो, वासेट्ठ, अञ्ञतरो सत्तो येन सो सत्तो तेनुपसङ्कमि; उपसङ्कमित्वा तं सत्तं एतदवोच– 'एहि, भो सत्त, सालाहारं गमिस्सामा'ति।

'अलं, भो सत्त, आहतो मे सालि सकिदेव द्वीहाया'ति।

'अथ खो सो, वासेट्ठ, सत्तो तस्स सत्तस्स दिट्ठानुगतिं आपज्जमानो सालिं आहासि सकिदेव चतूहाय–'एवं पि किर, भो, साधू'ति। अथ खो, वासेट्ठ, अञ्ञतरो सत्तो येन सो सत्तो तेनुपसङ्कमि; उपसङ्कमित्वा तं सत्तं एतदवोच–'एहि, भो सत्त, सालाहारं गमिस्सामा'ति।

'अलं, भो सत्त, आहतो मे सालि सकिदेव चतूहाया'ति।

---

१. वसलि – स्या० ; वसली – सी०। २. वधनिया – स्या०। ३. पातब्बयतं – सी०; पातब्बतं – रो०। ४. आहटो – स्या०। ५. सायंपातरासाय – स्या०।

"अथ खो ते, वासेट्ठ, सत्ता पदालतं उपक्कमिंसु परिभुञ्जितुं। ते तं परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठंसु। यथा यथा खो ते, वासेट्ठ, सत्ता पदालतं परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठंसु तथा तथा तेसं सत्तानं भिय्योसोमत्ताय खरत्तं चेव कायस्मिं ओक्कमि, वण्णवेवण्णता च पञ्ञायित्थ। एकिदं सत्ता वण्णवन्तो होन्ति, एकिदं सत्ता दुब्बण्णा। तत्थ ये ते सत्ता वण्णवन्तो ते दुब्बण्णे सत्ते अतिमञ्ञन्ति– 'मयमेतेहि वण्णवन्ततरा, अम्हेहेते दुब्बण्णतरा' ति। तेसं वण्णातिमानपच्चया मानातिमानजातिकानं पदालता अन्तरधायि। पदालताय अन्तरहिताय सन्निपतिंसु। सन्निपतित्वा अनुत्थुनिंसु– 'अहु वत नो, अहायि वत नो पदालता' ति! तदेतरहि पि मनुस्सा केनचि दुक्खधम्मेन फुट्ठा एवमाहंसु– 'अहु वत नो, अहायि वत नो' ति! तदेव पोराणं अग्गञ्ञं अक्खरं अनुसरन्ति[1], न त्वेवस्स अत्थं आजानन्ति।

अकट्ठपाकसालिपातुभावो

१५. "अथ खो तेसं, वासेट्ठ, सत्तानं पदालताय अन्तरहिताय अकट्ठपाको सालि पातुरहोसि अकणो अथुसो सुद्धो सुगन्धो तण्डुलप्फलो[2]। यं तं सायं सायमासाय आहरन्ति पातो तं होति पक्कं पटिविरूळ्हं; य तं पातो पातरासाय आहरन्ति सायं तं होति पक्कं पटिविरूळ्हं; नापदानं पञ्ञायति। अथ खो ते, वासेट्ठ, सत्ता अकट्ठपाकं सालिं परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठंसु।

इत्थिपुरिसलिङ्गपातुभावो

१६. "यथा यथा खो ते, वासेट्ठ, सत्ता अकट्ठपाकं सालिं परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठंसु तथा तथा तेसं सत्तानं भिय्योसोमत्ताय खरत्तं चेव कायस्मिं ओक्कमि, वण्णवेवण्णता च पञ्ञायित्थ। इत्थिया च इत्थिलिङ्गं पातुरहोसि पुरिसस्स च पुरिसलिङ्गं। इत्थी च पुरिसं अतिवेलं उपनिज्झायति पुरिसो च इत्थिं। तेसं अतिवेलं अञ्ञमञ्ञं उपनिज्झायतं सारागो उदपादि, परिळाहो कायस्मिं ओक्कमि। ते परिळाहपच्चया मेथुनं धम्मं पटिसेविंसु।

"ये खो पन ते, वासेट्ठ, तेन समयेन सत्ता पस्सन्ति मेथुनं धम्मं पटिसेवन्ते अञ्ञे पंसुं खिपन्ति, अञ्ञे सेट्ठिं खिपन्ति, अञ्ञे गोमयं खिपन्ति –

---

१. अनुपतन्ति – रो०; अनुस्सरन्ति – स्या०। २. तण्डुलफलो – सी०।

परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठंसु, तथा तथा तेसं सत्तानं[1] खरत्तं चेव कायस्मिं ओक्कमि, वण्णवेण्णता[2] च पञ्ञायित्थ। एकिदं सत्ता वण्णवन्तो होन्ति एकिदं सत्ता दुब्बण्णा। तत्थ ये ते सत्ता वण्णवन्तो ते दुब्बण्णे सत्ते अतिमञ्ञन्ति – 'मयमेतेहि वण्णवन्ततरा, अम्हेहेते दुब्बण्णतरा' ति। तेसं वण्णातिमानपच्चया मानातिमानजातिकानं रसपथवी अन्तरधायि। रसाय पथविया अन्तरहिताय . . सन्निपतिंसु। सन्निपतित्वा अनुत्थुनिंसु – 'अहो रसं, अहो रसं' ति! तदेतरहि पि मनुस्सा किञ्चिदेव[3] सुरसं[4] लभित्वा एवमाहंसु – 'अहो रसं, अहो रसं' ति! तदेव पोराणं अग्गञ्ञं अक्खरं अनुसरन्ति, न त्वेवस्स अत्थं आजानन्ति।

भूमिपप्पटकपातुभावो

१३. "अथ खो तेसं, वासेट्ठ, सत्तानं रसाय पथविया अन्तरहिताय भूमिपप्पटको[5] पातुरहोसि। सेय्यथापि नाम अहिच्छत्तको एवमेव पातुरहोसि। सो अहोसि वण्णसम्पन्नो गन्धसम्पन्नो रससम्पन्नो। सेय्यथापि नाम सम्पन्नं[6] वा सप्पि सम्पन्नं वा नवनीतं एवंवण्णो अहोसि। सेय्यथापि नाम खुद्दमधुं अनेळकं एवमस्सादो अहोसि।

"अथ खो ते, वासेट्ठ, सत्ता भूमिपप्पटकं उपक्कमिंसु परिभुञ्जितुं। ते तं[7] परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठंसु। यथा यथा खो ते, वासेट्ठ, सत्ता भूमिपप्पटकं परिभुञ्जन्ता तंभक्खा तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठंसु तथा तथा तेसं सत्तानं भिय्योसोमत्ताय खरत्तं चेव कायस्मिं ओक्कमि, वण्णवेवण्णता च पञ्ञायित्थ। एकिदं सत्ता वण्णवन्तो होन्ति, एकिदं सत्ता दुब्बण्णा। तत्थ ये ते सत्ता वण्णवन्तो ते दुब्बण्णे सत्ते अतिमञ्ञन्ति – 'मयमेतेहि वण्णवन्ततरा, अम्हेहेते दुब्बण्णतरा' ति। तेसं वण्णातिमानपच्चया मानातिमानजातिकानं भूमिपप्पटको अन्तरधायि।

पदालतापातुभावो

१४. "भूमिपप्पटके अन्तरहिते पदालता पातुरहोसि। सेय्यथापि नाम कलम्बुका एवमेव पातुरहोसि। सा आहोसि वण्णसम्पन्ना गन्धसम्पन्ना रससम्पन्ना। सेय्यथापि नाम सम्पन्नं वा सप्पि सम्पन्नं वा नवनीतं एवंवण्णा अहोसि। सेय्यथापि नाम खुद्दमधुं अनेळकं एवमस्सादा अहोसि।

१. एत्थ म० पोत्थके 'रसपथविं परिभुञ्जन्तानं' इति अधिको पाठो दिस्सति। २. वण्णवेवज्जता – सी०; वण्णविवण्णता – स्या०, रो०। ३. कञ्चिदेव – म०। ४. साधु – रो०। ५. भूमिपप्पटिको – सी०, स्या०। ६. सम्पन्ना – स्या०। ७. स्या० पोत्थके नत्थि। ८. कलम्बका – स्या०।

रसपथविपातुभावो

१०. "एकोदकीभूतं खो पन, वासेट्ठ, तेन समयेन होति अन्धकारो अन्धकारतिमिसा। न चन्दिमसुरिया पञ्ञायन्ति, न नक्खत्तानि तारकरूपानि पञ्ञायन्ति, न रत्तिन्दिवा पञ्ञायन्ति, न मासद्धमासा[1] पञ्ञायन्ति, न उतुसंवच्छरा पञ्ञायन्ति, न इत्थिपुमा[2] पञ्ञायन्ति, सत्ता सत्तात्वेव सङ्ख्यं[3] गच्छन्ति। अथ खो तेसं, वासेट्ठ[4], सत्तानं कदाचि करहचि दीघस्स अद्धुनो अच्चयेन रसपथवी[5] उदकस्मिं समतनि[6]। सेय्यथापि नाम पयसो[7] तक्कस्स निब्बायमानस्स उपरि सन्तानकं होति, एवमेव पातुरहोसि। सा अहोसि वण्णसम्पन्ना गन्धसम्पन्ना रससम्पन्ना। सेय्यथापि नाम सम्पन्नं वा सप्पि सम्पन्नं वा नवनीतं एवंवण्णा अहोसि। सेय्यथापि नाम खुद्दमधुं अनेळकं एवमस्सादा अहोसि। अथ खो, वासेट्ठ, अञ्ञतरो सत्तो लोलजातिको– 'अम्भो, किमेविदं भविस्सती' ति रसपथविं अङ्गुलिया सायि। तस्स रसपथविं अङ्गुलिया सायतो अच्छादेसि, तण्हा चस्स[8] ओक्कमि। अञ्ञे[9] पि खो, वासेट्ठ, सत्ता तस्स सत्तस्स दिट्ठानुगतिं आपज्जमाना रसपथविं अङ्गुलिया सायिंसु। तेसं[10] रसपथविं अङ्गुलिया सायतं अच्छादेसि, तण्हा च तेसं[11] ओक्कमि।

चन्दिमसुरियाविपातुभावो

११. "अथ खो ते, वासेट्ठ, सत्ता रसपथविं हत्थेहि आलुप्पकारकं उपक्कमिंसु परिभुञ्जितुं। यतो खो ते, वासेट्ठ, सत्ता रसपथविं हत्थेहि आलुप्पकारकं उपक्कमिंसु परिभुञ्जितुं, अथ तेसं सत्तानं सयंपभा अन्तरधायि। सयंपभाय अन्तरहिताय चन्दिमसुरिया पातुरहेसुं। चन्दिमसुरियेसु पातुभूतेसु नक्खत्तानि तारकरूपानि पातुरहेसुं। नक्खत्तेसु[12] तारकरूपेसु पातुभूतेसु रत्तिन्दिवा पञ्ञायिंसु[12]। रत्तिन्दिवेसु पञ्ञायमानेसु मासड्ढमासा पञ्ञायिंसु। मासड्ढमासेसु पञ्ञायमानेसु उतुसंवच्छरा पञ्ञायिंसु। एत्तावता खो, वासेट्ठ, अयं लोको पुन विवट्टो होति।

१२. "अथ खो ते, वासेट्ठ, सत्ता रसपथविं परिभुञ्जन्ता तंभक्खा[13] तदाहारा चिरं दीघमद्धानं अट्ठंसु। यथा यथा खो ते, वासेट्ठ, सत्ता रसपथविं

१. मासद्धमासा – म०। २. इत्थीपुरिसा – स्या०। ३. सङ्खं – सी०। ४. वासेट्ठा – स्या०, रो०। ५. रसपठवी – स्या०, रो०; रसा पथवी – सी०। ६. समतानि – सी०, रो०; समन्तानि – स्या०। ७. पायासो – सी०। ८. पस्स – स्या०। ९. अञ्ञतरे – रो०। १०. नेसं – सी०। ११. नेसं – स्या०। १२–१२. सी० पोत्थके नत्थि। १३. तब्भक्खा – स्या०।

कम्मं सामीचिकम्मं । न' नं' सुजातो समणो गोतमो दुज्जातोहमस्मि[2], बलवा समणो गोतमो दुब्बलोहमस्मि, पासादिको समणो गोतमो दुब्बण्णोहमस्मि, महेसक्खो समणो गोतमो अप्पेसक्खोहमस्मी ति । अथ खो नं धम्मं येव सक्करोन्तो धम्मं गरुं करोन्तो धम्मं मानेन्तो धम्मं पूजेन्तो धम्मं अपचायमानो एवं राजा पसेनदि कोसलो तथागते निपच्चकारं करोति अभिवादनं पच्चुट्ठानं अञ्जलिकम्मं सामीचिकम्मं । इमिना पि खो एतं, वासेट्ठ, परियायेन वेदितब्बं यथा धम्मो सेट्ठो जनेतस्मिं, दिट्ठे चेव धम्मे अभिसम्परायं च ।

धम्मकायो तथागतो

८. "तुम्हे ख्वत्थ, वासेट्ठ, नानाजच्चा नानानामा नानागोत्ता नानाकुला अगारस्मा अनगारियं पब्बजिता । 'के तुम्हे' ति– पुट्ठा समाना 'समणा सक्यपुत्तियाम्हा' ति– पटिजानाथ । यस्स खो पनस्स, वासेट्ठ, तथागते सद्धा निविट्ठा मूलजाता पतिट्ठिता दळ्हा असंहारिया[3] समणेन वा ब्राह्मणेन वा देवेन वा मारेन वा ब्रह्मुना वा केनचि वा लोकस्मिं, तस्सेतं कल्लं वचनाय–'भगवतोम्हि पुत्तो ओरसो मुखतो जातो धम्मजो धम्मनिम्मितो धम्मदायादो' ति । तं किस्स हेतु ? तथागतस्स हेतं, वासेट्ठ, अधिवचनं धम्मकायो इति पि ब्रह्मकायो इति पि धम्मभूतो इति पि ब्रह्मभूतो इति पि ।

§ ३. अयं लोको संवट्टति विवट्टति

९. "होति खो सो, वासेट्ठ, समयो यं कदाचि करहचि दीघस्स अद्धुनो अच्चयेन अयं लोको संवट्टति । संवट्टमाने लोके येभुय्येन सत्ता आभस्सरसंवत्तनिका होन्ति । ते तत्थ होन्ति मनोमया पीतिभक्खा सयंपभा अन्तलिक्खचरा सुभट्ठायिनो चिरं दीघमद्धानं तिट्ठन्ति ।

"होति खो सो, वासेट्ठ, समयो यं कदाचि करहचि दीघस्स अद्धुनो अच्चयेन अयं लोको विवट्टति । विवट्टमाने लोके येभुय्येन सत्ता आभस्सरकाया चवित्वा इत्थत्तं आगच्छन्ति । तेध[4] होन्ति मनोमया पीतिभक्खा सयंपभा अन्तलिक्खचरा सुभट्ठायिनो चिरं दीघमद्धानं तिट्ठन्ति ।

१-१. मनु – सी०, रो० । २. दुजातो० – स्या० । ३. असंहारिका – रो० । ४. ते च – स्या०, रो० ।

पिसुणाय वाचाय पटिविरतो फरुसाय वाचाय पटिविरतो सम्फप्पलापा पटिविरतो अनभिज्झालु अब्यापन्नचित्तो सम्मादिट्ठि[1]। इति खो, वासेट्ठ, येमे धम्मा कुसला कुसलसङ्खाता अनवज्जा अनवज्जसङ्खाता सेवितब्बा सेवितब्बसङ्खाता अलमरिया अलमरियसङ्खाता सुक्का सुक्कविपाका विञ्ञुप्पसत्था[2] खत्तिये पि ते इधेकच्चे सन्दिस्सन्ति। ब्राह्मणो पि खो, वासेट्ठ ... पे० ... वेस्सो पि खो, वासेट्ठ ... पे० ... सुद्दो पि खो, वासेट्ठ, इधेकच्चो पाणातिपाता पटिविरतो होति ... पे० ... अनभिज्झालु अब्यापन्नचित्तो सम्मादिट्ठी। इति खो, वासेट्ठ, येमे धम्मा कुसला कुसलसङ्खाता अनवज्जा अनवज्जसङ्खाता सेवितब्बा सेवितब्बसङ्खाता अलमरिया अलमरियसङ्खाता सुक्का सुक्कविपाका विञ्ञुप्पसत्था सुद्दे पि ते इधेकच्चे सन्दिस्सन्ति।

६. "इमेसु खो, वासेट्ठ, चतूसु वण्णेसु एवं उभयवोकिण्णेसु वत्तमानेसु कण्हसुक्केसु धम्मेसु विञ्ञुगरहितेसु चेव विञ्ञुप्पसत्थेसु च यदेत्थ ब्राह्मणा एवमाहंसु–'ब्राह्मणो व सेट्ठो वण्णो, हीना अञ्ञे वण्णा; ब्राह्मणो व सुक्को वण्णो, कण्हा अञ्ञे वण्णा; ब्राह्मणा व सुज्झन्ति, नो अब्राह्मणा; ब्राह्मणा व ब्रह्मुनो पुत्ता ओरसा मुखतो जाता ब्रह्मजा ब्रह्मनिम्मिता ब्रह्मदायादा'ति, तं तेसं विञ्ञू नानुजानन्ति। तं किस्स हेतु? इमेसं हि, वासेट्ठ, चतुन्नं वण्णानं यो होति भिक्खु अरहं खीणासवो वुसितवा कतकरणीयो ओहितभारो अनुप्पत्तसदत्थो परिक्खीणभवसंयोजनो सम्मदञ्ञाविमुत्तो, सो नेसं[3] अग्गमक्खायति धम्मेनेव नो अधम्मेन। धम्मो हि, वासेट्ठ, सेट्ठो जनेतस्मिं, दिट्ठे चेव धम्मे अभिसम्परायं च।

७. "तदिमिनापेतं, वासेट्ठ, परियायेन वेदितब्बं यथा धम्मो व सेट्ठो जनेतस्मिं, दिट्ठे चेव धम्मे अभिसम्परायं च।

"जानाति खो, वासेट्ठ, राजा पसेनदि कोसलो–'समणो गोतमो अनन्तरा सक्यकुला पब्बजितो'ति। सक्या खो पन, वासेट्ठ, रञ्ञो पसेनदिस्स[4] कोसलस्स अनुयुत्ता भवन्ति। करोन्ति खो, वासेट्ठ, सक्या रञ्ञे पसेनदिम्हि कोसले निपच्चकारं अभिवादनं पच्चुट्ठानं अञ्जलिकम्मं सामीचिकम्मं। इति खो, वासेट्ठ, यं करोन्ति सक्या रञ्ञे पसेनदिम्हि कोसले निपच्चकारं अभिवादनं पच्चुट्ठानं अञ्जलिकम्मं सामीचिकम्मं, करोति तं राजा पसेनदि कोसलो तथागते निपच्चकारं अभिवादनं पच्चुट्ठानं अञ्जलि-

---

१. सम्मादिट्ठी – म०, स्या०। २. विञ्ञुपसत्था – स्या०। ३. तेसं – रो०। ४. पसेनदिनो – सी०।

दीघ० – ३.

अज्झुपगता यदिदं मुण्डके समणके इब्भे कण्हे बन्धुपादापच्चे । तयिदं न साधु, तयिदं नप्पतिरूपं[1], यं तुम्हे सेट्ठं वण्णं हित्वा हीनमत्थ वण्णं अज्झुपगता यदिदं मुण्डके समणके इब्भे कण्हे बन्धुपादापच्चे' ति । एवं खो नो, भन्ते, ब्राह्मणा अक्कोसन्ति परिभासन्ति अत्तरूपाय परिभासाय परिपुण्णाय, नो अपरिपुण्णाया" ति ।

४. "तग्घ वो, वासेट्ठ, ब्राह्मणा पोराणं अस्सरन्ता[2] एवमाहंसु– ब्राह्मणो व सेट्ठो वण्णो, हीना अञ्ञे वण्णा; ब्राह्मणो व सुक्को वण्णो, कण्हा अञ्ञे वण्णा; ब्राह्मणा व सुज्झन्ति, नो अब्राह्मणा; ब्राह्मणा व ब्रह्मुनो पुत्ता ओरसा मुखतो जाता ब्रह्मजा ब्रह्मनिम्मिता ब्रह्मदायादा' ति । दिस्सन्ति खो पन, वासेट्ठ, ब्राह्मणानं ब्राह्मणियो उतुनियो पि गब्भिनियो पि विजायमाना पि पायमाना पि । ते च ब्राह्मणा योनिजा व समाना एवमाहंसु- ब्राह्मणो व सेट्ठो वण्णो, हीना अञ्ञे वण्णा; ब्राह्मणो व सुक्को वण्णो, कण्हा अञ्ञे वण्णा; ब्राह्मणा व सुज्झन्ति, नो अब्राह्मणा; ब्राह्मणा व ब्रह्मुनो पुत्ता ओरसा मुखतो जाता ब्रह्मजा ब्रह्मनिम्मिता ब्रह्मदायादा' ति । ते ब्रह्मानं चेव अब्भाचिक्खन्ति मुसा च भासन्ति बहुं च अपुञ्ञं पसवन्ति ।

§ २. धम्मो हि सेट्ठो जनेतस्मि

५. "चत्तारोमे, वासेट्ठ, वण्णा– खत्तिया, ब्राह्मणा, वेस्सा, सुद्दा । खत्तियो पि खो, वासेट्ठ, इधेकच्चो पाणातिपाती होति अदिन्नादायी कामेसु-मिच्छाचारी मुसावादी पिसुणवाचो फरुसवाचो सम्फप्पलापी अभिज्झालु ब्यापन्नचित्तो मिच्छादिट्ठी । इति खो, वासेट्ठ, येमे धम्मा अकुसला अकुसल-सङ्खाता सावज्जा सावज्जसङ्खाता असेवितब्बा असेवितब्बसङ्खाता नअलम-रिया नअलमरियसङ्खाता कण्हा कण्हविपाका विञ्ञुगरहिता, खत्तिये पि ते इधेकच्चे सन्दिस्सन्ति । ब्राह्मणो पि खो, वासेट्ठ ... पे० ... वेस्सो पि खो, वासेट्ठ ... पे० ... सुद्दो पि खो, वासेट्ठ, इधेकच्चो पाणातिपाती होति अदिन्ना-दायी कामेसुमिच्छाचारी मुसावादी पिसुणवाचो फरुसवाचो सम्फप्पलापी अभिज्झालु ब्यापन्नचित्तो मिच्छादिट्ठी । इति खो, वासेट्ठ, येमे धम्मा अकुसला अकुसलसङ्खाता ... पे० ... कण्हा कण्हविपाका विञ्ञुगरहिता सुद्दे पि ते इधेकच्चे सन्दिस्सन्ति ।

"खत्तियो पि खो, वासेट्ठ, इधेकच्चो पाणातिपाता पटिविरतो होति अदिन्नादाना पटिविरतो कामेसुमिच्छाचारा पटिविरतो मुसावादा पटिविरतो

१. नप्पटिरूपं – सी०, स्या० । २. असरन्ता – सी० ।

४. अग्गञ्ञसुत्तं

§ १. वासेट्ठभारद्वाजा भगवन्तं उपसङ्कमिंसु

१. एवं मे सुतं । एकं समयं भगवा सावत्थियं विहरति पुब्बारामे मिगारमातुपासादे । तेन खो पन समयेन वासेट्ठभारद्वाजा भिक्खूसु परिवसन्ति[1] भिक्खुभावं आकङ्खमाना । अथ खो भगवा सायण्हसमयं[2] पटिसल्लाना वुट्ठितो पासादा ओरोहित्वा पासादपच्छायायं अब्भोकासे चङ्कमति ।

२. अद्दसा खो वासेट्ठो भगवन्तं सायण्हसमयं पटिसल्लाना वुट्ठितं पासादा ओरोहित्वा पासादपच्छायायं अब्भोकासे चङ्कमन्तं । दिस्वान[3] भारद्वाजं आमन्तेसि – "अयं, आवुसो भारद्वाज, भगवा सायण्हसमयं पटिसल्लाना वुट्ठितो पासादा ओरोहित्वा पासादपच्छायायं अब्भोकासे चङ्कमति । आयामावुसो भारद्वाज, येन भगवा तेनुपसङ्कमिस्साम; अप्पेव नाम लभेय्याम भगवतो सन्तिका धम्मिं कथं सवनाया[4]" ति । "एवमावुसो" ति खो भारद्वाजो वासेट्ठस्स पच्चस्सोसि ।

३. अथ खो वासेट्ठभारद्वाजा येन भगवा तेनुपसङ्कमिंसु; उपसङ्कमित्वा भगवन्तं अभिवादेत्वा भगवन्तं चङ्कमन्तं अनुचङ्कमिंसु । अथ खो भगवा वासेट्ठं आमन्तेसि – "तुम्हे ख्वत्थ, वासेट्ठ, ब्राह्मणजच्चा ब्राह्मणकुलीना ब्राह्मणकुला अगारस्मा अनगारियं पब्बजिता । कच्चि वो, वासेट्ठ, ब्राह्मणा न अक्कोसन्ति न परिभासन्ती" ति ?

"तग्घ नो, भन्ते, ब्राह्मणा अक्कोसन्ति परिभासन्ति अत्तरूपाय परिभासाय परिपुण्णाय, नो अपरिपुण्णाया" ति ।

"यथा कथं पन वो, वासेट्ठ, ब्राह्मणा अक्कोसन्ति परिभासन्ति अत्तरूपाय परिभासाय परिपुण्णाय, नो अपरिपुण्णाया" ति ?

"ब्राह्मणा, भन्ते, एवमाहंसु – 'ब्राह्मणो व सेट्ठो वण्णो, हीना अञ्ञे वण्णा । ब्राह्मणो व सुक्को वण्णो, कण्हा[5] अञ्ञे वण्णा[5] । ब्राह्मणा व सुज्झन्ति, नो अब्राह्मणा । ब्राह्मणा व ब्रह्मुनो पुत्ता ओरसा मुखतो जाता ब्रह्मजा ब्रह्मनिम्मिता ब्रह्मदायादा । ते तुम्हे सेट्ठं वण्णं हित्वा हीनमत्थं वण्णं

१. पटिवसन्ति – सी० । २. सायन्हसमयं – म० । ३. दिस्वा – रो० । ४. सवणाया – सी० । ५–५. कण्हो अञ्ञो वण्णो – रो० ।

創世期経

अग्गञ्ञसुत्तं

Aggañña Sutta

アンガンニャ・スッタ

出典

THE
DĪGHANIKĀYA

ナーランダ版第3巻

創世期

一九九一年九月十四日　初版発行

定　価　一二〇〇円
著　者　麻原彰晃
発行者　松本知子
　　　　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二ー八ー一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四二九）六〇四三
振　替　東京二ー一〇九三二五
乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© Shoko Asahara 1991
ISBN4-900497-72-X　C0014　P1200E

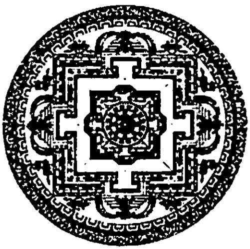
「創世期」に続き、麻原彰晃が贈る
"仏陀からのメッセージ" シリーズ

PART2

「人間の堕落——
転輪聖王の登場と不在」

(仮題)

8月29日発売! 予価1200円



以下、続々発刊予定。

PART3「戦慄の世界——地獄篇」

PART4「果てしなき戦い、憤怒天と三十三天」

オウム出版

麻原彰晃尊師 collection の本

ここに真理がある！
オウム出版



生死を超える

改訂版

死を超越した魂の自由を高らかに謳歌

B6判／1854円

激しい修行の末に死後の世界を経験し、ついに解脱を得た著者が、だれも示すことのできなかった「解脱」の真実の姿を浮き彫りにする不朽の名著。これなくして精神世界は語れない。



超能力・秘密のカリキュラム／健康編

改訂版

クリヤ・ヨーガの秘法が甦った！

B6判／1100円

ヒマラヤに伝わる肉体浄化の秘法を公開して大反響を呼んだ本書が、新たに体験談も加わり、改訂版となって再登場。アレルギー性鼻炎から癌・エイズまで、あらゆる病気を撃退するヨーガの技法が満載！



イニシエーション

悟り――覚者の智慧が光を放つ

B6判／2163円

本来、選び抜かれた弟子にしか伝授されない秘儀の数々を惜しみなく公開！ 悟りのプロセス、近未来の予言、そして豊富な体験談……。最高の叡智に達した著者によって説かれる真理に、魂は震撼する。



マハーヤーナ・スートラ

解脱――その真実の道筋が語られた！

B6判／3090円

解脱を果たし、悟りを得、絶対的な真理に到達した著者によって、大乗仏教・ヨーガの全貌が明かされた！ さらに、史上稀に見る解脱の体験談も同時に掲載。精神世界史上不滅の金字塔。



滅亡の日

麻原彰晃「黙示録大預言」の秘密のベールを剥ぐ

B6判／1854円

その難解さゆえに人々の関心を集めてきた『ヨハネの黙示録』。究極の智慧に到達した著者が、その謎に挑戦！ 獣の数字666、そしてハルマゲドン……。そこに描かれていたのは人類破滅のシナリオだった！



滅亡から虚空へ（続・滅亡の日）

麻原彰晃の「黙示録大預言」完全解読

B6判／1900円

前著『滅亡の日』で開示されなかった、大破局の後に来る新たなる戦いとは？ だれにも解けなかった預言書のすべてが、今初めて明らかにされる。『ヨハネの黙示録』衝撃の全貌！



原始仏典講義一

今、覚者の限りない叡智がここに甦る！

A5判／2500円

いにしえの最終解脱者が説いた法の真髄が現代の最終解脱者によって、ついに明らかになった。釈迦牟尼の教義の根幹をなす『阿含経』『南伝大蔵経』の二大経典を、麻原尊師が鋭く解析！



マハーヤーナ・スートラPART2

実践するための生きた経典

B6判／2100円

お経は読むためのものではない。読んで、考え、実践するためのものである。『南伝大蔵経』から選び抜かれた経典と尊師説法、そして体験談が、絶対的な幸福への道筋を指し示す。

八月下旬発売予定

超能力・秘密の開発法

増補・大改訂版

超能力のつかない修行は本物ではない！

B6判／980円

空中浮揚・透視・幽体離脱、未来予知……。正しい修行によってだれでも超能力を得ることができる！ 実体験に基づいた超人へと至る最高のメソッドを大公開。豊富な体験談がその真実を裏付ける。

●ご注文は書店にてお願いします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。（送料各300円）

●オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話：03（3439）6043／郵便振替：東京2-109325

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『創世期』読者係」までお送りください。
また、オウム真理教に興味を持たれた方は、下記の資料請求券を添付したハガキ、あるいは電話にて全国のオウム真理教道場までお問い合わせください。詳しい案内書をお送りいたします。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『創世期』読者係」

◆各道場のご案内◆
富士山総本部 0544(54)1267
〒418-02 静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部 03(3327)8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場） 03(3396)9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
大阪支部 06(397)1022
〒532 大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部 092(474)2877
〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部 052(252)0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部 011(241)4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部 075(371)3759
〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部 022(268)3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部 0762(51)8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部 0888(84)8286
〒780 高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部 082(264)6250
〒732 広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部 045(243)8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部 0734(24)2859
〒640 和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部 0292(26)8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部 0474(66)4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所 0485(74)6205
〒366 埼玉県深谷市萱場441-8
〈海外支部〉
ニューヨーク支部 212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部 (0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

キリトリ線

創世期
資料請求券

気軽に読めて、ためになる

月刊雑誌 *Enjoy Happiness* 創刊！

えんじょい・はぴねす

予価850円

「これは面白い！」
と思わずうなる内容が盛りだくさん。
ぜひ、ご愛読ください。

❖

「EH会員」になろう！

『えんじょい・はぴねす』の定期購読（6カ月単位）を
申し込まれた方は、
「〝えんじょい・はぴねすの会〞会員」、略して
「EH会員」になることができます。
楽しく読めて、しかも会員ならではの
素晴らしい特典がいっぱい！
あなたも、気軽に「EH会員」になってみませんか。

『えんじょい・はぴねす』・「EH会員」についてのお問い合わせは、
オウム真理教本部・各支部まで（前ページをご覧ください）





ISBN4-900497-72-X C0014 P1200E 定価一二〇〇円(本体一一六五円)



